ひび割れた大地にインパラの骸が転がる。さっきまで風を切り悠々と駆け回っていた雌だ。俺は一番肉の甘い腹を食い一休みしていた。血の臭いを嗅ぎつけた禿げ鷹が一羽、ゆっくりと空から舞い降りた。俺は舌を鳴らした。
「いつも、すいませんねえ」
最近いつも周りを彷徨いている目障りな禿げ鷹だ。奴は挨拶もそこそこに骨に残った肉をつつきはじめた。
「タカタカ、又お前か」
禿げ鷹のうるさい嘴の音を、俺はそのまま奴の名前にしていた。
「その呼び方、何とかしてもらえませんか？この前、仲間に笑われましたよ」
嘴の先に肉のカスを付けたままこちらを振り返った。
「文句があるのか？なら俺にまとわりつくな。お前の醜い顔を見るのはうんざりだ」
ほんの軽い気持ちで言ったのだろう。しかし思わぬ俺の言葉に奴は慌てた。そしてあからさまに態度を変え、お世辞をくちばしに乗せ始めた。
「滅相もない。タカタカで十分です。貴方のような勇敢なライオンに名を付けていただいて感謝しないといけないのに、私は愚かでした。この通りお詫びします」
デコボコした気持ち悪い頭をタカタカは何度も下げた。頭に止まっていたハエが振り落とされないようにとしっかりと捕まっている。俺はゲップをしながら奴のオドオドした姿を楽しんだ。
「ふん、心にもない事を」
「いえいえ、今日の見事な狩り、いゃ～拝見していて溜息がでましたよ。あれほど足の速いインパラをあっという間に仕留めるなど・・ムブユさんにしか出来ませんよ。本当にたいしたものだ。貴方に目をつけられたらどんな奴でも終わりですな、運が悪かったと諦めるしか仕方ない」
褒められて悪い気はしない。しかしそれを奴に悟られるのもシャクだった。俺はニコリともせず、かえって不機嫌そうな顔で唾を吐いた。
「気安く俺の名呼ぶな、汚れるだろうが」
「いや、これはまた失礼しました。気が付きませんで」
確かに俺の狩りはいつも完璧だ。幸運がもたらした偶然ではない。疾風のように荒野を駆け抜け、稲妻のごとく一発で相手を追いつめる脚力、俺はチーターより早いライオンだと恐れられている。
「ならこうしましょ。私が下部で貴方が主人。ご主人様とお呼びすればムブユさんの、いや貴方の名前も呼びすてにすることもなくなりますよ」
本気なのか冗談なのかタカタカはひざまずいき深々と礼をきった。
「禿げ鷹を従えたライオンなど聞いたこともない。それこそいい笑い物だ」
それでもタカタカは頭を上げようとしない。俺は悪戯をしたくなった。
「そうだ、お前が俺の名を呼ばなくてもいい方法を思いついた」
「なんですか、それは？」

タカタカは伏せた頭を少しおこし、上目遣いで俺を見た。俺はしばらく奴の目をじっとみて何もいわなかった。
「もったへぶらずに教えてくださいよ」
「なぁに簡単なことさ、喰っちまえばいい。どうだ名案だろ」
タカタカは身を縮め、情けなさそうな顔で笑った。
「ご冗談を、私なんか美味くありませんよ。なにせ死肉ばかり口にしているもので我ながら体臭の酷さにめまいがします。悪いことは言いません、止めてください。病気にでもなったら大変です」
最近は少しなれたが、確かに奴の身体からは鼻を突くような強烈な悪臭が漂ってくる。たまに、臭いがあまりに酷くこいつ糞でも身体に塗り込んでいるんじゃないかと疑いたくなるような時もあるくらいだ。
「死肉とはなんだ、俺の仕留めた獲物が生きが悪いとでも言いたいのか。第一なんだそのだぶついた腹は。毎日旨い物ばかり食っている証拠だろ」
恥ずかしいのかタカタカは翼で前を隠した。しかしその羽は艶々と黒光りしていた。
「おしゃるとおり良い思いばかりさせて頂いています。だからこそお役に立ちたいと申しあげているのです」
うやうやしい言葉が増えていくほど反対に軽薄さが増していく。
「白々しい、命乞いをしようとその場限りの上手を言うな。魂胆は見えている、どうせ俺をおだてておけば餌に困る事はないと思っているのだろう」
尻尾をタカタカの細い首に巻き付け、きつく絞め上げ引き寄せた。奴は苦しそうに羽根をばたつかせ濁りきった目を大きく見開いた。
「ううぅぅ」
クチバシをパクパクさせながら言葉にならないうめき声を漏らすタカタカ。あとほんの少し力を入れたら首は折れる。
「本当です、貴方の為なら地の果てまで飛んでいきましょう。もし、ほしい物があるなら必ず見つけてきますよ。だから止めてください。息が息が...」
羽をばたつかせ喉の奥から言葉を絞り出した。タカタカの申し出が俺の野心をくすぐった。
「本当か？」
「ええ、命に誓って」
俺は自分がほしい物はなにかと考えた。しかしこれと言って思いつくものもない。羽をばたつかせるタカタカを横目にボンヤリと遠くを眺めた。バオバブの巨木が目に入った。木陰ではガセルの親子が気持ちよさそうに日よけをしていた。安心しきって母親の乳を飲む子供、それを父親が優しげな眼差しで見つめる。俺はだいぶ前に別れた両親を思い出した。父と母はいつも喧嘩ばかりしていた。母はいつも不満をもらしていた。
「あんたがだらしないから、こんな小さな縄張りしかないんじゃない。これでどうやって獲物が迷い込むのよ、私も子供も飢え死によ」
「お前みたいな醜い雌じゃ、狩りをする気にもなれねんだよ」
そう言う父の気持ちもわからないではない。子供の俺から見ても母の容姿は雄に近いと感じた。そんな母が喧嘩の最後に言う事は決まっていた。
「あんた達は母さんの見方よね」

「違うよなあ？父さんがいいだろ」
弟たちは何も言わなかったが俺はいつも反抗した。
「いい加減にしてくれ。あんた達なんて大嫌いさ」
俺はそんな両親を見るのが嫌で早くに巣立ちした。
「そうだタカタカ、ほしい物が一つある」
子供の頃の苦い思い出が俺にある事を望ませた。
「とびきり美しい雌を見つけてこい」
血の気が引き真っ青な顔のタカタカはやっとの事で頷いた。俺は締め上げていた尻尾を緩めてやった。崩れるように地面にへたり込むタカタカ。ピクリと動く様子もない。散歩に出てきたサソリが奴を小高い丘と勘違いし、昇りそして下っていった。いつまでたっても動かないので死んだのかと蹴飛ばしてみた。奴は左足を痙攣させながら羽をばたつかせた。
「止めてください。ちゃんと生きていますよ。これ以上されたら本当に死んでしまいます」
本気で怒っているようだ。俺は腹を抱え大笑いした。
「それはすまなかった、なら今度は本当に息の根止めてやろう」
尻尾を高く振り上げた。それを見たタカタカは首を縮め翼で頭を覆うと、真っ黒い卵のように丸まった。
「待ってください。解りましたから無茶しないでください。探してきますから」
今度は泣きそうな声で訴えた。
「どんな雄の腰も立たなくさせてしまうほど飛び切り美しい雌だぞ」
俺は振り上げた尻尾をそのままに、先端の毛をクルクルと回した。
「でも何故ですか？美しい雌など沢山いるでしょ」
「どうってことない雌ばかりだ」
「雌なんて所詮そんなものでしょ？肝心なのはあそこの調子じゃありませんか？」
俺は地面に腹這いになり、自分の顔を前足にのせた。
「俺もそう思っていた。だから今までは雌の顔も見ず、ただやりたい時にやりたいだけした」
「でしょ」
耳中に迷い込んだハエを後ろ足で掻き出しながら言った。
「だがもうそれ飽きた」
「じゃあ何の為に？」
「そろそろ腰を落ち着けようと思ってな」
羽の隙間からタカタカが首を傾げるのが見えた。
「解りませんね、それとその”美しい雌”と何の関係があるんです？」
「空を飛び回る奴らにはわからんだろうが、美しい雌の側には必ず強い雄がいるものだ。そして強い雄は必ず広い縄張りを持っている」
タカタカは翼から頭を出し、そしてなるほどと頷いた。足はまだ微妙によたついていたが顔色は元に戻っていた。俺は遙か遠くにぽつんと見えるバオバブの大木に目をやった。
「あんな木の木陰で雌に産ませた我が子と自分の土地を眺めたてくなったのさ」
「なるほど、よう御座いましょう、そう言うことなら。とびきり美しい雌を探してきますよ」

奴は二つ変じてあっさりと了承した。
「えらく物わかりがいいな」
実際その時の俺はタカタカなど信用していなかった。
「裏切って逃げたりしたら、どうなるか解ってるだろうな。必ず見つけ出して食ってやる」
「ええどうぞお好きなように。でも私にも望みがあります」
「なんだ」
「もしお望みの雌を見つけだし、貴男が雄から雌を見事奪い取ったなら」
「なら？」
「その雌の骸を全てを私にください」
「肉を独り占めにしようというのか？」
「私は未だにライオンの肉だけは口にしたことはありません。だから味わったてみたくて仕方ないのですよ。それも誰にも邪魔されずゆっくり堪能してみたい。それくらいいいでしょ。雌と縄張りに比べたら私の望みなんてあまりにもささやかだ。それに...」
「それに何だ」
「私との約束を守るためにも貴方は勝たなくてはならない。もし途中で逃げ出すような無様な負け方しようものなら、私は渡り鳥はおろか、土の中の蛇にさえ貴方の事を失態を言いふらします。そうすれば貴男を恐れる物はいなくなる。つまり、私が彼方を裏切らない変わりに、彼方も私から逃げられないんですよ」
「大げさな言い方だな。だが、まあいいだろう、上手いライオンの肉をたらふく食わせてやる、後はお前次第だ」
「必ず見つけだしますとも。貴男の腰が疼き、とろけそうになる雌を探して戻ってきますよ」
「そう願いたいものだな、さあ、ぐずぐずするな行け」
「今からですか？」
「ああそうだ、月が顔を見せぬうちにすぐに旅立て。それとも・・・又俺に弄ばれたいのか？」
「わかりましたよ。強引な方だ。しかしいいですね、私との約束を忘れないでくださいよ。絶対ですよ」
タカタカの何度も何度も念を押した。
「くどい、早く行け」
俺は雄叫びを上げ、それは地鳴りのように大地に響き渡った。タカタカは意を決して身の丈の何倍もある翼を広げた。待っていたかのように追い風がふわりと奴を持ち上げた。そして一気に空高く昇っていった。俺は見えなくなるまで奴の背中を見ていた。

夕日が地面に溶け落ちようとしていた。俺は毎日空を眺めてはタカタカの帰りを待っていた。しかし２度目の満月を迎えても何の音沙汰もない。奴を信じた愚かさを自覚し始めていた頃だった。赤く染まった雲間から黒い鳥が現れた。一目で奴だとわかった。やっと戻ってきた。期待に胸を躍らせた。次第に大きくなる姿、その羽ばたきの力強さに何かしらの答えを持ってきた事を悟った。タカタカは俺の頭上で旋回し始めた。そして着陸場所を

見定めると急降下した。一刻も早く話を聞きたい、奴が降りるであろう場所へ駆け寄った。風を切り裂く音がし、目の前が暗くなった。タカタカの影が俺を覆ったのだ。
「ただいま戻りました」
妙に物静かな口調だった。
「待ちくたびれたぞ、それでどうだった？いたか？」
奴の目がギラリと光った。どことはいえないが以前のタカタカとは様子が違った。
「どうした？何かあったのか」
詰め寄って訪ねた。慌てる様子もなくタカタカは静かに羽を閉じた。光を遮っていた影も同じように身を引いた。そして入れ替わるように夕日が目を刺した。俺は光を裂けようと手をかざした。
「まさか、何も見つけられずに帰ってきたんじゃないだろうな」
「いいえ、いましたよ。貴方の思い描く以上の雌が。それこそ美しさは言うに及ばず品を感じる雌でした。たとえどんな言葉で彼女を飾ろうと言葉の方がかすんでしまう程です」
満足そうに頷く俺を見てタカタカは意味ありげに首を振った。
「しかし喜んでいいものなのかどうか？」
「何が言いたい」
「いたんですよ。貴男の言うとおりその雌の側に」
「雄か？そらいるだろうな当然の話だ」
「貴男は当然というが、私にはあの雄が本当にライオンなのか疑わしい。彼は姿だけはそう見えるが肉体は別の生き物だ。あれでは誰も近寄れはしないでしょう」
タカタカの神妙な顔が可笑しかった。
「ほほう、それはそれは。ご忠告ありがとう。だがなそんな話は腐るほど聞いた。しかし戦ってみれば何のことはない。誰かが強いなんて噂は、負けた奴が恥ずかしさを覆い隠すために言いふらした迄のこと」
「私はこの目で見たんだ、それを信じないんですか」
「そうは言っていない。ただ強いと聞かされて『ハイそうですか』と俺が怖じ気づく雄でないことぐらい知っているだろう」
「なら聞きますが、像を倒した事がありますか？それも子連れの母象ですよ」
タカタカはは急に突拍子もないこと言い始めた。
「子連れの母象？」
「ええ、そのとおり」
子連れの母像は雄象に比較にならぬ程危険な存在だ。迂闊に子供に近寄ろう物なら暴れる山のように辺り構わず踏みつぶす。いかに屈強なライオンでも子連れの母象にだけは近寄らなかった。
「像はは敵に回してはいけない相手だ」
「普通の雄ならそう考えるのが当然でしょう。しかしその雄は違いました」
「そいつは象を仕留めるのか？」
「ええ易々と」
タカタカは表情を変えなかった。俺は一笑した。
「出来る訳がない」

「そう思うなら貴方に彼を倒す事など不可能です。悪いことは言いません諦めなさい」
タカタカの口ぶりに腹が立った。まるで上から見下ろされているような、馬鹿にされているような気がした。
「途中で逃げるなと約束させたのはお前だろ。なにを今更」
「確かにあの時はそう言いました。けれど勝負にならない事をしても私には得る物がない。始めから負けると解っている貴男に加勢したくもないですし」
「そんなことを言う為にお前は帰ってきたのか。解ったぞ雌を探し回るのが嫌なって適当な事をいって脅しているんだろ」
こんな禿げ鷹に甘く見られてなるものか。衝動的に尻尾をタカタカの首に巻き付けた。しかし以前のように奴は慌てなかった。それどころか呆れ顔で溜息をついた。
「嘘なんか付いても仕方ありません。その雄は事実、自分の何倍もある母象を仕留めたんですよ」
「どうせ初めから怪我をしていた象なんだろ」
「いいえ、そんなハイエナのような卑怯な雄じゃありません。目の澄んだ精悍な雄でした」
禿げ鷹がハイエナを卑下することに疑問を感じながら、タカタカの目をのぞき込んだ。濁りきった瞳は少しも動かない。それどころか不安げな表情をした自分が奴の黒目に写っていた。それを見た俺は奴の話が真実であることを確信した。身体がこわばった。足の下に小枝があったのかもしれない。体の均衡が微妙に変化したせいでその枝が折れ、パキッと乾いた音がした。
「本当なのか？」
ゆっくりと頷くタカタカ。
「彼は単身、群を成す象立ちに飛び込みました」
その口調は恐ろしい言い伝えを話すのように淀みなく続いた。
「まず、耳をつんざく程の雄叫びで子象を威嚇しました。子象の異変に気づいた母親が振り返ろうとする。彼はその一瞬を見逃さない。母像の頭上高く飛び上がり太陽の光の中に身を隠す。焦って空を見上げたその時、彼は絶妙の具合に顔に覆い被さる。必死に振り落とそうと暴れる母象。しかしあっという間に両目は潰され何も見えなくなる。彼は時を置かずしてもっとも危険な鼻に噛みつく。鋭い牙が硬い皮膚を切り裂き、大木のような太いそれが地面にボトリと落ちる。目をやられた母象は狂ったよう暴れ回り、まわり雄象が助けようにも近づけない。彼は母象を弄ぶかのように四方八方から責め立て、母象の身体はいつのまにか彼の鋭い爪切り裂かれ皮膚が剥ぎ取られていた。無惨にも破れた皮の隙間から内蔵がこぼれ落ち、もがき苦しむ母の悲鳴に子象はただ呆然と立ち竦むばかり。母象は為す術もなく土煙をあげ地面に崩れ落ちました」
身震いした。話の通りなら、それは降り注ぐ巨大な石を避けながら山に戦いを挑むようなもの。何故あえて危険な母象を標的にするのか？黙り込む俺を見てタカタカは頷いた。
「何故、母象なのかでしょう？それは私も思いました。けれど、ちゃんとした訳があったんですよ」
タカタカは唾を飲み込み話続けで渇いた喉を潤した。
「群れには子象をつれた母象が沢山いますよね。彼女達は我が子に危害が及ぶのを恐れ一斉に逃げ出そうとする。すると護衛役の雄象たちは大勢の母象と子象達を追いかけざるを

得なくなり、結果的に瀕死の母象は見捨てられざるをえなくなる。つまり一番危険に思える行動が、他の象たちからの逆襲を防ぐ事になるんですよ」
「だが、象一頭は餌にするには多すぎるだろう。食い残してハイエナに横取りされるくらいなら水牛でもとっていたらいいじゃないか」
「いいえ、像である必要があるんです」
「そいつは像を食うと？ばかな」
「群が去った後、近くの草むらから一頭の雌が現れました。我が目を疑いました。雌ライオンと言うにはあまりに美しすぎた。豹のようにしなやかな肉体を持ちながら、それでいてライオンの雌として十分な丸みを持つふくよかな尻。私は”やっと見つけた”と小躍りしました。彼女は彼に近寄り頬についた象の血を舐めたのです。そして何も言わずに熱い眼差しを投げかけました。雄は満足そうな顔で彼女を引き寄せ、当然の権利と彼女の後ろから覆い被さろうとしました。けれど彼女はそれをあっさりと交わし雄の鼻先を舐めたのです。そして草むらに向かって呼びかけました。するとゾロゾロとライオンの子供達がが姿を現しました。その数ざっと２０頭弱。全てが雄ライオンか雌にそっくりで紛れもなく彼らの子供だと解りました。雌は雄の身を預けながら吠えしました。多分おあがりなさいと言ったのでしょう。子供達はまだ完全に死に切らぬ母象に駆け寄りました。そして血の臭いに昂奮したのか目の色を変え肉を貪り始めたました」
雌は一度に４～５頭の子供しか産むことができない。子供の総数は縄張りの広さに応じて１０頭前後に自然と調整されていく。それが集団としての限界だ。それを倍の２０頭を養うには倍以上の縄張りと餌が必要となってしまう。第一元来、家族を持った雄ライオンは狩りをしない。狩りは雌の仕事、雄は外敵から家族を守り、あとは一日中雌に又借り腰を振り続ける。そんな事はこの大地に暮らす者なら誰もが知っていた。タカタカは常識が常識でないその雄の集団を深く分析していた。
「結局、あれほどの集団になると雄は子供の面倒で忙しいのでしょうね。仕方なくなのかどうかはわかりませんがに雄は狩りを請け負わざるをえなくなった。けれど、ちまちました狩りでは大勢の子供に等しく食事を与えることが出来ない。彼は大量の餌を確保する手段として一番効率的な方法を選んだのでしょうね」
「それが像の狩りということか」
「ええ、巨体に群が子象はまるで黒蟻のようでしたよ」
黒蟻と聞いて震え上がらぬ物はいない。奴らは地面を覆い巣尽くすほどの大群でやってきては、一気に獲物を覆い隠す。
生きていようが死んでいようが関係ない。耳や目、そして口の隙間のような軟らかい肉をその鋭い刃で切り刻む。踏みつぶしても踏みつぶしても死ぬ事はない。黒蟻の集団そのものが姿を持たない生き物なのだ。
「子供達の食欲は旺盛で、もがき苦しみ悲鳴を上げる母象の乳房を先を争って引きちぎり貪りました。もう象の身体なのか子供達の身体なのか区別が付きません。何もかもが血で染まり、子供達は大きな虫のように肉の中で蠢き、あっという間に母象の身体は消えてなくなりました。後にはお腹をぱんぱんに膨らませた子供達。雌ライオンはそれをみて雄に微笑んだのです。そして今度は私を食べてと言わんばかりに尻を突きだしました。雄は雌の後ろ首に噛みつき動けないようにした後、真っ赤に開いた肉の花びらに棘の突いた男性

器を突き立てました。雌は歓喜の声を上げ自ら激しく腰を使いだしました。
そして翌朝の薄日が差しても疲れ一つ見せず、もっと欲しいとねだる有様です」
雌といい子供達といい、その雄ライオンを取り囲む家族全てを熱く感じた。
「始め、あの雄ライオンだからこそ彼女を手に入れられたのだと思いました。しかし今、こうやって話をしているうちに、それは間違いだったと気づきました」
月はすっかり真上に昇っていた。キリンに下枝をむしられたバオバブが闇夜に浮かんでいた。昼間寝ているバオバブ達は夜になると息を吹き返す。そして夜露を求め天高く伸ばした枝を使い、雨乞いのように彼らは踊る。見慣れたそのその踊りにタカタカは目をやりながら自分が話したことの整理をはじめた。
「どういう事だ？美しい雌も、多くの子供も、そして広い縄張りも、どう聞いても強い雄だからこそ手に入れらた物ばかりじゃないか。」
「果たしてそうでしょうか？私は正反対に思えるのです。つまりあの雌が強い雄を選び抜いたように思えるのです。あの美貌、雄を引き寄せる官能的な肉体、そして遙か遠くにいてもわかる雄を誘う魅惑的な香り。彼女という存在は一歩間違えば毒にもなりかねない。雌は自分の魅力をよく知っているはずです。たから私を手に入れたいならここまで昇ってきなさい、少しぐらい強くても意味はないと限界まで無理をさせられているように見えました」
枯れ草の間を何かが横切った。次の瞬間小さな悲鳴と共に羽音が空へ舞い上がっていった。ミミヅクがウサギかマングースでも見つけたのだろう。足に獲物を引っかけた鳥影が月を横切っていった。昼と夜の命の営みが入れ替わろうとしていた。
「馬鹿な、確かにあいつらは子供は産めるかもしれない。しかし俺たちがいなければ自分の居場所も見つける事も出来ないだろ。例えどんなに美しい雌でもこの厳しい大地に暮らす限り生まれたてのモズのヒナとなんの変わりもない。そんな物に俺たち雄が選ばれてどうする」
連れ去られた家族を心配そうに眺める影が二つ、草むらに立ち空を見上げていた。
しかしもう二度と会えないと諦めたのだろう、その二つの影はどこかへ走り去った。
「もし貴方が彼女と会い、もし運良く自分の雌に出来たとき、果たして今と同じように言っていられるのでしょうかね？」
「孕ましちまえば従順な雌になるさ」
この時、闇夜に浮かぶ地平線が盛り上がっていくように見えた。まるでここから先へは足を踏み入れてはならない。そう俺に警告しているような気がした。
「けれど、おかしなものですね」
夜空に瞬く光の小石を仰ぎタカタカは言った。
「地上の雄は愚かで悲しすぎる。強い弱いと張り合ってみても所詮一時のこと。それでも命を懸けて戦おうとする」
「生きるためだ、それにな」
「それになんですか？」
「他にすることが無いだろうよ」
「確かにそれもそうですね」
タカタカは日の暮れた夜空を見上げ笑った。暗闇に太った月が静かに座っていた。

「今宵は満月ですね、雌もご苦労な事だ」
俺にはタカタカの言いたい事がすぐに分かった。満月の夜、この大地のどこかでまた新しい命が産み落とされている。
奴はそう言いたかったのだ。その翌日俺達は旅に出た。

タカタカに導かれ俺はどれ程遠くに来たのだろう？地の底まで見えそうな深い谷を飛び、ある時は雲の上に頭を出すほどの高い山を越えた。そして今、灼熱の荒野を歩いている。地面から立ち上る熱気は炎そのもの。季節は乾季の真っ直中。ここは産まれ育った場所とは比べ物にならぬ程風は乾ききっていた。地面はズタズタにひび割れ、ワニの鱗のように不気味な模様を見せていた。旅する物達の目は等しく虚ろ、かといって誰も立ち止まる事はなかった。なぜなら立ち止まることは死ぬことだからだ。みんな命の限界ぎりぎりを歩いていた。
「タカタカまだなのか？一体あと、どれくらい行けば着くんだ」
日差しが強すぎて空を見上げることも出来ない。仕方なく頭上を飛んでいるであろうタカタカに聞こえるように大声で叫んだ。その時、火傷しそうに熱い風を吸い込んでしまった。胸の奥がジッと音を立てた。地面にうつふし激しく咳き込んだ。声などでない。胸をかきむしり唾を飲み込もうとした。けれどざらつく舌はまるで枯れ葉。一滴の唾も滲んではこない。俺は焦った。もがけばもがくほど咳は激しくなり更に風を吸い込んだ。目の前が急に暗くなり上と下、右と左の感覚が不確かになった。怖くなった。こんな所で死ぬのか。後悔する間もなく意識は陽炎の向こうへ消えていった。

俺は自分の咳で目を覚ました。
「ここは？」
体を起こし辺りを見回した。背の低い草の向こうに何本かの木が見えた。水の臭いもした。近くに川でもあるのだろう。俺は空を見上げ違和感を感じた。何か変だ。雲が近くに見えるのだ。まるで空に浮いているような不思議な感覚だった。
「やっと気づいたか」
振り返ると一頭の雄ライオンがこちらを見つめ立っていた。俺は咄嗟に身構えた。足はふらついたが、それでも力を振り絞り吠えて見せた。しかし奴は微動だにしなかった。
「やめとけ、死に損ない。そんな身体で何が出来る」
薄ら笑いを浮かべながら、自分の分厚い胸板を俺にひけらかした。
「やってみなけりゃわからんだろう」
俺は爪を土に突き立ていつでも飛びかかれるよう姿勢をとった。
「折角助けてやったというのに礼ぐらい言っても良いだろう」
そいつは近くの岩に飛び乗った。太い足からは想像も出来ない軽い身のこなしだった。
「なら、アンタがここまで俺を？」
「他に誰がいる、まさか自分でここまで歩いてきたとで思うのか？」

奴はニヤリと牙を覗かせた。俺はそれを聞いてひとまず爪を仕舞った。
「そう、それでいい。あと少しでも動いていたら、お前のの顔半分、俺の爪で無くなっていたところだ。いきがるのもいいが、相手を見てからにしろ」
奴は腰を下ろし、自信ありげに言った。
「それはどうだろうな？アンタの腹にも風通しのいい穴があいていたかもしれないだろうが」
「驚いた。さっきまで泡を吹いていた死に損ない言葉とは思えんな。まあいい若さに免じて聞き流してやろう」
俺は奴の言葉も聞かずに、辺りを彷徨きだした。
「ここはどこだ？俺が倒れた場所は枯れた荒野のはず、なにのここには草や木が青々と生えているじゃないか。どういう事だ説明しろよ」
「おいおい、それじゅまるで連れてきて悪い事をしたような言われ方だな。まったくだから俺は嫌だったんだ。とにかくそこを２．３歩行ってみろ」
言われるがままに背の高い草をかき分け足を前に進めた。俺は目を疑った。今自分が立っている場所は赤茶けた大地に突き出した地面の上だった。それも半端な高さじゃない。その証拠に目の前を鷲が悠々と横切っていった。
「気をつけろ、落ちたら最後だぞ」
振り返ると奴は後ろ足で耳をかいていた。
「のどが渇いたろう。あそこに木があるだろ。その根元から水がわき出している。飲んだらいい」
その心遣いが俺はかえってうさんくさく思えた。
「おかしいじゃないか、喰ってしまえばすむものを何故助けた？」
「答えないといけないか？」
困った顔で奴は答えを探した。しかし適当な言い訳も見つからなかったのか、あきらめ顔で空を見上げた。
「かみさんがどうしてもって助けてやれと言うんでな」
思いもよらぬ答えに苦笑した。奴は恥ずかしそうにその時の様子をぼそぼそと語った。
「ちょうど狩りの帰りでな、家族全員吐きそうな程腹がふくれていた。だから瀕死のお前を見ても喰う気にさえならなかったのさ。俺はそのままに通り過ぎようとした。だが、かみさんがお前の前から動かないんだ。『助けてやろうよ、死なすには若すぎるじゃない』始めは聞こえない振りをしていたんだが、そのうちどうにもこうにも不機嫌になってな。取り憑く島もなくなった。仕方なく背中に乗せ帰ってくる羽目になっちまった。しかし、あんな所でぶっ倒れるお前も間抜けだが。その間抜けを助けてやろうなんて言うかみさんも物好きとしか言いようがないな。全く雌は何を考えているのかわ・・・。」
「情けない、それでも雄か？」
「うるせえよ」
「ああわかったよ。しかし、よっぽと怖いかみさんなんだろうな。気の毒になあ」
皮肉たっぷりにせせら笑ってやった。
「笑いたけりゃ笑え。お前には要はない。とにかく水を飲んだらさっさとここを出ていってくれ。言っておくが二度と助けてやらんぞ」

「ああ、俺もそのつもりもないさ、あんたはせいぜいかみさんのご機嫌取りでもしてなよ」
「ったく、どこまでも減らず口叩きやがって」
奴は苦々しい顔で俺を見送った。

草むらを抜けると満々と水をたたえた池があった。水辺では小鳥達が水浴びをしていた。水中には草が漂い、池全体をほんのり緑に染めていた。立ち上る冷たい風。水面は太陽の光を反射させキラキラと揺らめいていた。俺は池に吸い込まれるように顔をつけた。枯れ葉のような舌が水をすくあげた。あまりの美味さに身体が震えた。息をするのも忘れ水を喉に運んだ。真っ白だった舌先が赤みを取り戻し、朦朧としていた頭から霧が晴れていく。水面に映る自分が泣いているように見えた。顔からしたたり落ちる水滴が涙に見え、正直言って情けない姿だった。
「ようやく元気になったようね」
池の向こう岸の茂みがザワザワと揺れた。
「誰だ？」
スラリとした尾が草むらから伸びた。一目で雌ライオンの尾だと解った。
「命の恩人に聞く態度じゃないわね？まあいいわ、貴方達がさっき話していた”かみさん”よ」
一頭の雌がゆっくりと草むらから姿を現した。俺は息を飲んだ。端正な顔に魅惑的な瞳、愛らしい口元。そして何よりライオンとは思えない程すらりと引き締まった身体。美しいと口にする事さえ俺は忘れてた。
「相手に尋ねるならまず自分から先に名のるものなじゃない？」
口を開けたまま、何も言えずにいる俺を見て彼女は笑った。
「あら、どうしたの？言葉を忘れたのかしら？」
いたずらっぽい瞳が俺の中を覗こうとした。だらしなくゆるんだ頬をキッと引き締めにらみ返した。
「少し驚いただけだ。ムブユだ。お前の名は？」
「お前なんて呼ばないでよ。失礼ね、そんなんじゃ雌に相手にされないわよ。もっと気を使いなさい」
小生意気な奴だ、俺は舌を鳴らした。
「まったく行儀が悪いわね、一度しか言わないわよ、私はバハラ、さっき貴方が話していた彼がバラ」
「バハラにバラか、似た名だな。夫婦して仲がいいことで」
「ええ、とっても」
「とってもねえだあ？よくもぬけぬけと」
「彼は、貴男のような無愛想で偉そうな雄じゃなの、優しいのよ」
「それだけの雄なんじゃないのか？」
「どういう意味？」
「俺にはあんたにだらしない奴にしか見えなかったがな」
「焼けるの？」

「馬鹿を言うな、なぜ俺が？」
「ならなんでさっき黙り込んだのよ、それにさっき驚いただけって言ったけど、一体何に驚いたの？変わったことでもあって？」
彼女はキョロキョロと自分の周りを見回し、いかにも腑に落ちなさそうに首を傾げた。俺はいたたまれなくった。
「やめろ」
「だからなにを？何もしていないわ」
「いいからやめろ」
彼女は苦笑した。
「ならいいなさい、何を驚いたのか、そうしたら許してあげる」
俺は口を固く沈黙した。彼女は悪戯な目で俺の答えを引きずり出そうとした。しかしいつまで立っても言おうとしない俺にしびれをきらせ、溜息をついた。
「素直じゃないわね。言っても減る物じゃないのに。でも好きよ、そんな困った顔の雄を見るのは」
自分をひけらかすように彼女はぐるりと回って見せた。水面の光が彼女を抱よせ、彼女はその揺らめきに身を任せ舞った。息を呑んだ。雄が雌に望む美しさ全てがその身体に凝縮されていた。
「ねえ、私を抱きたい？」
「初対面の俺に何故そんなことを聞く」
「なら、あんまり熱い目で見つめないで。てっきりそうなのかと思うじゃない、それとも私の勘違いかしら？」
そう言いながら悩ましい腰つきをで彼女は挑発してきた。
「そうやっていつも雄を誘うのか？」
「誘ってなんかないは、言葉遊びよ」
「あいつのかみさんじゃなけりゃ、今頃、犯していただろうよ」
「あら案外、お堅いのね。常識にとらわれる方なのかしら？それとももしかして彼が怖いの？」
俺は吹き出した。
「冗談じゃない。雌にこびを売る奴など、誰が恐れるものか」
「あら、家の亭主もずいぶんな言われようね。でも、そう言う貴方は強いの？口ばっかりだったりして」
「遙か向こうに山が見えるだろう。俺は彼処を越えた所で暴れ回っていた。誰も俺を恐れ近寄らない程さ」
「ただ単に嫌われていただけじゃないの？それに強いと思ってるのは自分だけだったりして」
「可愛くない言い方だな」
「意地悪したいのよ。ごめんなさい。でもどっちにしても私に振れるのは無理よ。彼より強い雄なんていないし、これからも現れない。一番の雄だからこそ私は彼に身体を許すの。だからこの世の雄は彼だけ、ごめんなさいね」
自慢そうに話す彼女の口を塞いでやりたくなった。俺はゆっくりと池の縁に沿って彼女に

近づいた。しかしいっこうに逃げようとしない。それどころか近づけば近づくほど俺に向けられる視線は艶めかしさを増していく。あと４，５歩と言うところまで近づいたとき彼女は言った。
「このまま私を抱く気じゃないわよね？そんなの最低の雄のすることですものね」
「最低ね」
「だって、そうは思わない？誰かの取った肉をこっそり食べるなんてハイエナと同じじゃない？」
「しかしそんな奴もいることはいるだろ」
「でも貴方は違う、そうでしょ？私を自由にしたいなら彼を殺せばいい。そうしたら何でもしてあげるし、してあげられる。思う存分気持ちよくしてあげるわ」
彼女は笑みを浮かべながら草の上に寝ころび、物欲しそう喉を鳴らした。
「別にその気はなかったがそこまで言われちゃご要望に応えなくちゃならなくなるな？しかし、後悔はしないのか？」
俺は彼女の背後に回った。
「構わないわ、でも貴方のように言いながら彼に目をくり抜かれ死んだ雄が沢山いるのよ、それも惨めよね。はっきり言えば笑っちゃう」
「正直に若い雄が欲しいといえばいいものを、回りくどい言い方をするものだ」
「そうかしら？私はいたって素直なつもりよ」
俺は彼女に身体を寄せ首の後ろを軽く噛んだ。彼女は身をよじらせ気持ちよさそうに目を閉じた。
「ああ、いい匂い。確かに若い雄ねえ」
そういう彼女自身も甘い香りを漂わせていた。あまりに心地よさそうな横顔が憎らしかった。既に俺の身体は明らかに反応を示していた。しかし彼女は俺のプライドを盾にして一番安全な所でくつろいでいる。なんとしたたか雌なのだろう。
「すぐにお前の望み通りにしてやるよ」
「あらまたお前呼ばわり？ちょっと早いんじゃない」
目をつぶったまま、まるで寝言でも言うように彼女は言った。
「いや、すぐにでも片づけて来てやる。俺が迎えにくるまで念入りに毛繕いでもしておきな」
俺は彼女から身体を離すと今来た道に顔を向けた。
「バラなら出かけたは、今日は無理ね。それに貴方もまだ本当じゃないんでしょ。そんな身体じゃ彼の相手なんか出来ないわ。バラだって病人相手じゃ可愛そう。ちゃんと体調整えてから出直してきなさい。彼は逃げないし、私だってどこにも行かないかは。それ貴男が逃げたけりゃそれでもいいし」
彼女は尻尾の先で俺の喉をなぞった。確かにさっきまで死にかけていたのだ、いくら元気になったとはいえ本調子ではない。それに一つ気になる事もあった。ここはひとまず無理をせず時を置こうと思った。
「それもそうだな」
「聞き分けがいいわね。好きよそういうの。無茶して良いことはないは。慌てて行動して結局失敗する雄は愚か物。私、弱い雄以上に賢くない雄の方が嫌いなの」

「強くて賢ければいいのかい？」
「最低条件よ」
「あとは何？」
「そんなことは自分で考えなさい、聞かないと気づかない雄なら、知る必要もないわ」
言っている意味が俺にはよく分からなかった。と言うよりこの雌が本当は何を考えているのか理解出来ていなかった。こんなにもやっかいな雌は初めてだとその時思った。
「じゃあ行くわね、楽しみにしてるから」
「可愛そうな亭主だな」
「あらなんで？私は彼が最高に好きよ。尽くしても尽くしてもそれ以上の物を必ず与えてくれる。何の不安もないもの」
彼女は俺から身体を離した。そしてお遊びの時間は終わりと表情を変えた。
「さあここから出ていって。いつまでも居座られたら迷惑よ」
土埃でも払うように追い立てられた。後で思えば彼女が現れた時から俺は狂い始めていた。

ギラギラと照りつける太陽が大地を焦がし、凄まじい熱風が喉を鳴らし地表を彷徨っていた。草木は枯れ果て荒野は見渡す限り一面の土。水を求め歩く水牛の群はいつ脱落者が出てもおかしくない程弱り切っていた。俺は巨木に寄りかりり逆さまの山を眺めていた。太陽が真上に昇ったとき突如現れた不思議な山だった。誰かの悪戯なのか？このくそ熱いのに暇な奴もいるものだと思った。それにしてもなんと過酷な場所なのだろう。あちこちに点在する屍は、どれも太陽にやられ血の一滴まで抜き取られたように干からびていた。俺がこの地に足を踏み入れた時からずっとこうだった。いや大昔からこうだったのだろう。あの夫婦がこんな場所で暮らせるのも高台に湧く水があるからだ。そうでない物は到底生きられない。
「何を考えているんです？」
頭上から声がした。タカタカだとすぐに分かった。
「どこへ行っていた。捜していたんだぞ」
「てっきりあの雄に食われたのかと思っていましたよ」
奴はバサバサと音を立て降りてきた。
「それにしても運のいい、よく生きて戻ってこれましたね」
その時、タカタカの目を見て俺はっとした。
「もしかして、あいつがお前の言う雄なのか？」
タカタカは頷いた。もやもやとしていた目の前の霧が一瞬にして消えた。
「すると、お前の言う雌というのはバハラの事か？」
「彼女に会ったんですね？」
「ああ、会った」
「でどうでした？」
「確かに文句のつけようがないほど美しさだ。それでいて...」
「魅力的？官能的？」
「俺は言葉をしらん、だが彼女を見たなら他の雌など抱く気にならないだろうな」

実際昨夜、彼女の姿がちらついてよく眠れなかった。
「貴方は何か良いことでもありました？もしかしてやっちゃたとか？」
俺の顔を伺いながら嫌らしい笑みをタカタカは浮かべた。
「そんな雌でないことぐらいおまえも知っているだろう。もしも強引に迫ったなら。彼女は自ら命を絶ったかもしれない。たいした奴だよ。雌一頭にあんな風に苛立ったのは始めだ」
タカタカは頷いて見せた。
「それでどうします？やりますか？」
「決まっている。殺すさ、彼女の申し出だ」
「助けてもらった相手でも？」
「礼は言った。それで終わりさ」
「そう言うと思いました。で、もういいんですか？身体の方は」
「一晩寝たら楽になった。それにさっきヌーをく食って腹ごしらえもしたしな。身体をもてあましていたとろだ」
それを聞いたタカタカは待ってましたと羽を広げた。
「じゃあ今から行きますか？向こうに見える岩山の麓にバラが今したよ」
「狩りか？」
「いいえ、あんな所に獲物はいません。それにここはもうすぐ雨期の雨で水浸しになります。そうなったら戦いどころではありません。今が絶好の機会ですよ」
タカタカは足の爪で枯れ草をつまみ風に飛ばした。確かに奴の言うとおり風向きが変わっていた。そのかぜに乗って雨雲がやってくる事を俺たちは感覚で知っていた。
「あと、どれくらいで降る？」
「さあ？でも今日一日は持たないでしょう」
そうと分かったらこうはしていられない。俺は忙しなく腰を上げた。
「死ぬも生きるも貴方の腕次第。もし勝ったなら約束通り雄ライオンの肉を戴きますからね」
「どうせ俺が負けたら俺の肉をくうんだろう」
「そうならない自信があるのでしょう？」
「あたりまえだ」
「それを聞いて安心しました」
タカタカは真っ青な空に向かい飛び立った。そしていつものように２．３回、頭の上を旋回し、後につづけと一鳴きした。その時既に生ぬるい風が大地に吹き込み始めていた。

行き着いた場所は切り立った岩山の麓。傍らには恐ろしいほど深く暗い谷が口を開けていた。つまり俺の立っている場所は山頂から谷底までの斜面残った僅かな地面でしかなかった。背筋に寒気を覚えながら地面から荒々しく突き出した岩をすり抜けた。俺の背中にのっていたタカタカが急に小さな声で囁いた。
「ほらあそこ、見えるでしょ。枯れ木の生えているすぐ真下」

見ると、山肌の斜面に空いた洞窟の前でバラが目を閉じ座っていた。一体、何をしているのだろう？俺は息を潜め暫く様子を伺った。眠っているのだろうか？しかしいつまでたっても動く気配はない。俺はどうにもしびれを切らし彼の前に歩み出た。彼は驚かなかった。それどころかこちら見ようともしなかった。
「こんな時に面倒な奴が来たものだ」
なんとも迷惑そうにバラは言葉を吐いたあと、右前足を使い耳の後ろから顔の前まで丹念に毛繕いをはじめた。
「バハラになんか吹き込まれたんだろう。まったくしょうがない雌だ」
「何をしに来たのか察しがついているようだな。それとも聞いたのか？」
「いや特になにも、だがお前がわざわざやってきたんだ。大方の事はわかるさ。ああそうそう一つだけ言っていた」
俺の耳がぴくりと反応した。
「雌を喜ばせる言葉も知らない子供だとさ」
「それは散々だな。先日はあれ程俺に抱かれたいようなことを言っていた雌の言葉とはおもえん」
「そこだよ、雌の言ったことを真っ正直に受け取る純真さをもてあそばれたのさ、悪いことはいわん。アイツに関わるのはよせ。損をするだけだ」
毛繕いに使った前足を丹念に舐めながら彼は蚤を真っ赤な舌先でこすげ取った。まったく緊張感のないその姿に俺は自分が何をしに来たのか一瞬忘れそうにさえなった。
「そう言うあんたの方はどうなんだ」
「俺か？俺はあいつといると退屈しないんだ。無理を言われるのもこれ又楽しいものさ」
「あんたのように情けない雄を見ていると苛々するぜ、雌なんか押さえつけてつっこめば言うこと聞く奴らじゃないか」
「ほほう、それは勇ましい。そう出来たならどんなにいいかわからんな」
「俺があんたのかみさんをそうしてやるよ」
「すまんがそれは他の雌にしてくれ。俺が困る」
「美しい雌だからか？」
暫く考えた後で彼は首を振った。
「いや、多分違うな。はっきりこうだとはいえないが。彼女がいないと不安なのさ。安心して眠れもしない」
「あんたそれで恥ずかしくないのか？」
「何を恥ずかしがる必要がある。身の程も知らずの若造が大口叩くほうがよぽと恥ずかしいと思うがな」
「うるさい、だまれ」
「それはこちらの言う台詞だ、早くここから出ていってくれないか、忙しいんでな」
「俺が怖いのか？」
「助けられたくせをして、怖いかだと？ちょっと頭おかしいんじゃないのか？」
「あんたとやって負けた訳じゃない」
「強がりもここまで来ると感心するよ」
「強がりかどうかは勝負してから決めてくれ。その為にあんたを捜しはるばるやってきた

んだ」
「ほほう、と言う事は俺が誰だか知っているようだな。ご苦労なことだ」
大きなあくびを一つつき、眠そうな目をこじった。緊張感のかけらもない無防備な姿は、戦う意志を放棄しているように見えた。
「恐ろしいライオンと聞いたが、これほど情けない奴だったとはな。あんたが旦那じゃ彼女が俺を誘うのもわかるな」
じりじりとバラとの距離をつめた。そして、どこかから見ているタカタカの視線を気にし、普段以上にに強い自分を演じようとした。
「とことん愚かな奴だな、せっかく忠告してやっているのに・・・何も解っていない。若いお前にはわからんがもしれんが雄と雌には釣り合いが大切なんだ。いくら彼女が欲しいと叫いても今のお前じゃ役不足なんだよ」
「ぐたぐた言っている暇があったら逃げる用意でもしな、じゃなきゃこっちから行かせてもらう」
爪を伸ばし威嚇のポーズをとった。バラは鼻水をすすりながら立ち上がり、大きく体を揺らすと同時に耳を立てた。
「どうしても戦いたいのか？」
「いったろ、あんたの代わりになってやると。さあ始めようぜ」
バラは気を吐く俺を見もせず、何故か背中の洞窟を振り返った。
「その代わり一つだけ約束をしろ。決してこの洞窟には近づくな」
「何か隠しているのか？」
「おまえには関係ないことだ、目あては俺なんだろう？よけいな事は考えずついてこい」
そう言うとバラは山の急斜面を登り始めた。
「どこへ行くつもりだ」
何も言葉は返ってこない。ただ黙々と足場の悪い斜面を登っていった。逃げられると思い後を追った。背中を見せているのにバラに少しの空きもない。それどころか棘のような殺気をヒシヒシと感じた。さっきとは全く違うライオンを見ている気がした。山肌を踏みしめるバラの足下から小石がカラカラと落ちた。俺は左右にそれをよけながらバラが立ち止まるのを待った。登れば登る程勾配はきつくなる。振り変えると麓の平地が遙か下に見えた。目の前を見慣れぬ鷲が口に蛇を加え横切った。灰茶色の体に金色の目をもつ大きワシだ。バラは空に登ろうというのだろうか？もういい加減にしろと怒鳴りかけたその時、奴の足は止まり、そして山頂近くに突き出した細長い岩棚に飛び乗った。
「来いよ、おあつらえの場所だ」
風に背中を押され俺はそこへ足を乗せた。岩の両脇は暗黒の谷、まるで空に浮いているようだ。
「さあもっと近くへ。いい眺めだぞ」
足が前にでない。ある程度の広さはあるはずなのに、とても狭く感じた。足ががたがたと震え腰に力が入らない。無意識に蹴った小石が谷底へ落ちていった。目がそれを追い無意識に吸い込まれそうになった。咄嗟に岩の上にうずくまった。
バラが笑った。
「可哀想に、震えているじゃないか。いいぞ今ならまだ逃がしてやる」

まるで遊びにでも来ているようバラは飛び跳ねた。岩が揺れる事はなかったが、彼を見ているだけで汗が吹き出した。
「冗談じゃない。あんたの最後を見とれるんだ。嬉しくてしょうがない」
そうは言ってみたが戸惑っていた。いくら早く走れてもこんな狭い所では何の意味もない。どうやって戦えばいいのか？俺の不安を察したか、谷底を流れる風が不気味な唸り声をあげた。食事が待ちきれないと喚いているようだ。
「残念だな。折角、助けてやったのになあ。しかしこれ以上情けを掛けてはお前への侮辱になるだろ」
「だったら、どうだと言うんだ？早く見せてもらいたいものだ」
「お望み通り、きっちりとどめを刺してやるさ」
バラは真っ赤な舌をのぞかせ牙を剥いた。遠くで雷が鳴った。振り返ると黒雲が地平線の飲み込みながら押し寄せて来た。
「荒れる前に終わらせちまおうぜ。勇敢なムブユさんよ」
バラはたてがみを振り乱し、雲に隠れそうな太陽に向かって吠えたてた。巨大なコウモリのように群れをなし飛んでいた鳥達がその声に驚き、一瞬にして散り散りになった。バラの目が空へ流れた。俺はそれを見逃さなかった。先手必勝、頭を下げ一気にバラの胸めがけ突進した。跳ね飛ばし谷底へ落とそうと思った。しかし既にバラの姿はそこにはなかった。空へと飛び、あっという間に太陽の光に消えた。風が止まった。俺の目はバラを捜し太陽の輪郭をなぞった。黒い点が見え気がした、とおもった次の瞬間、右目に激痛が走った。火を押し当てられたように熱い。俺は左目一つで反対側へ飛んだ。
「ほら、前の右目だ。自分で自分の目玉を見れる奴はそうそういないぞ」
バラの爪の先に俺の右目がぶら下がっていた。彼はそれをグルグルと振り回した。
「それにしても痛そうだ。だが困ったな、そんな顔じゃ尚更バハラはは渡せないな。あいつが怖がってちかよらんだろう」
右目から溢れでる血が頬を伝い鼻や口に流れ込んできた。許される事なら悲鳴を上げ、のたうち回りたかった。しかしそんなみっともないことは出来ない。俺は残った左目に力を込めた。
「まだ左目が残ってるぞ。こっちも欲しいんだろう、早く持って行けよ」
「当然頂くさ。しかし少し待っていろ、邪魔なんでこれをくっちまう」
バラは俺の目玉を口に入れ噛みつぶした。ぐにゃりと形を変える目玉から水のようなものがドロリと流れ出た。彼はそれをゆっくりと飲み、如何にも旨かったと舌なめずりをした。
「さあ、そしたら次は...」
バラは殺す手順を一つずつ言葉にして並べていった。その間に俺は必死で考えた。どうしたらこの岩棚を自分に有利に使えるのだろうか？その時、斜め前の岩の隅に僅かな亀裂が入っている事に気づいた。もしかしたら...。バラから視線をそらさずに、さりげなくその場所に移動した。
「何を企んでいる？」
俺の動きに何らかの意味を感じたバラは目を光らせた。
「企む？こんな場所で何が出来る。仕掛けたくても何もない。大体、あんたはそれが狙いだったんだろう」

後ろ足で亀裂を軽く岩を押した。音はしなかったが岩が微かにきしんだ。
「のこのこ付いてくるお前の方が間抜けなんだ。何を考えているかはわからんが精々あがくんだな、しかし言っておくが、もう悠長なことは言っていられないぞ」
気が付くと黒雲が空一面を覆っていた。この場所にいたら吹き荒れるであろう風に谷底へ突き落とされてしまう。
そうなれば戦いどころではなくなる。バラの言うとおり早く決着を付けないといけない。
「さあ、もうお遊びはおわりだ」
ジリジリとにじみ寄ってくるバラ。俺は亀裂に爪をかけ姿勢を落とし身構えた。先に動いたのはバラだった。
「これで終わりだ」
そう言い残すと又もや視界から消えた。残った左目を閉じ、息を殺し、耳を澄ませた。『風を読め。もう少し、あと少し。我慢しろ』そう自分に言い聞かせ、その一瞬を待った。長い長い沈黙が俺を飲み込んでしまいそうになった。もう耐えられないと目を開けそうになったその時、頭上から吹き下ろす微かな風きり音が聞こえた。今だ。左目を開けると同時に足下の岩を自分の足が砕けそうなほどの力で蹴り落とした。そしてその反動を利用し向かい側の岩棚の付け根に飛んだ。片目で計った距離感など当てにならぬ事ぐらい知っていた。しかし飛ぶしかなかった。後ろ足が岩から離れた瞬間、背中に痛みが走った。それでも振り返らなかった。どうにか足の立つ場所へ。そう願いながら空中をもがいた。だが身体はどんどん岩棚の外へと反れていった。このままでは谷底へ落ちてしまう。見えない物をつかみ取るかのように手足をばたつかせた。しかしなにも変わらなかった。見る見るうちに谷底へ落ちていく。『もうだめだ...』と諦めたかけた時。突風が吹いた。腹を蹴り上げられるような激しい風だった。身体は枯れ葉のように上空に舞上げられた。次の瞬間風はピタリと止み、そのまま背中から岩の上に叩き付けられた。背中に走る痛み、手足がしびれ息さえ吸えない。それどころか胸に残っていた僅かな息さえうめき声となって漏れていった。
「運のいい奴だ、助かりやがった。しかし逃げることで精一杯じゃないか？一体、お前のどこが強いというんだ」
せせら笑う声が聞こえた。微かに開いた左目にはバラが映った。奴の乗った岩は何事もないように見えた。『やはりだめだったか...』俺はこの時、完全に自分が追いつめられた事を悟った。今まで経験した事のない緊張感が胸を閉めつけた。
「今度こそ息の根を止めてやる」
今までは自分が負ける事などありえないと思っていた。しかし現実にそれが迫っていると実感した今、俺は初めてバラに皮を引き裂かれる自分の姿を想像した。俺達ライオンにとって生きている獲物の内蔵が一番上手い。悲鳴を聞くと食欲がますのだ。奴もそうやって俺を喰うのだろう。それを考えると自分から谷底へ落ちてしまいたくなった。その時だった。突如、足下から轟音が鳴り響いた。雷が落ちたのかと身体を堅くした。しかしそうではなかった。バラの乗っていた岩が裂け始めたのだ。バラは慌ててこちら側に飛び移ろうとした。しかし遅かった。砕けた岩が奴の身体を飲み込むように下へと引きずり込み、声一つ残す間もなく目の前から消えた。俺は身を乗り出した。粉々に砕けた岩が谷底へ消えていく。そこにバラの姿を見つける事は出来ない。砕けた岩の下敷きになっているに違い

ない。彼は死んだ。俺は肩でい息をしながら自然と笑いが込み上げてきた。
「お喜びの所を申し訳ないが、まだ死んじゃいない」
振り返ると血だらけの右前足が岩を掴んでいた。
「嘘だ、そんな事があるはずがない」
悪い夢だと頭を振り目を凝らした。しかしそれは紛れもない現時だった。荒い息づかいと共に左前足が岩を掴み、
やがてバラが姿を現した。俺は彼の姿をみて目を背けた。顔の半分が砕け耳は無くなっていた。身体からは骨が肉を突き抜け飛び出していた。無惨と言うほか言葉がない。死んでいて当然の傷だ。奴のすさまじい形相に圧倒され俺は身動き出来なくなった。
「バハラが帰りを待っている。こんなところでくたばちゃいられねえんだ」
その言葉を聞いてバハラを思うバラの気持ちの強さにやっと気がついた。驚きであり不思議だった。
「何故そこまでバハラにこだわる、雌一頭に命をかける価値などないだろう？」
「笑うなら笑え、どんなに雌ライオンが沢山いてもバハラという、小憎らしい雌はあいつだけだ」
「ならなんでかみさんがあんたを殺してくれと言うんだ、飽きられている証だろう」
したたり落ちた自分の血を踏みしめ彼は一二歩前に歩みでた。指の間の毛を血が滲み上ってきた。
「それは違う」
「あんたがそう思いたいだけじゃないのか」
「おまえは昔の俺を知らないからそう言うんだ」
「もっと強かったとでも言いたいのか？こんな時に自慢話ならよしてくれ」
バラは顔を横に振った。そのせいでやっとついていた皮が剥がれ落ち肉があらわになった。
「反対だ、俺は自分でも嫌になるくらいひ弱な雄だった。ウサギ一羽捕まえるのもやっと、いつも腹を減らしていた。バハラの前に一緒に暮らした雌もいた、しかし色んなことが重なって他の雄に奪われた。というより愛想を尽かされた」
「ほら見ろ、結局、その雌もそしてバハラも、あんたじゃ物足りないんだろ」
「そうじゃない、あいつだけは違うんだ」
「またそれか、何がどう違う、あんたの話を聞けばみんなそう思うだろうよ」
「最後まで聞け、俺はいい、だがバハラを誤解されたままにしておけない」
どこからその声が出てくるのかと思うほど傷ついた彼の体全体が響いた。
精神的に追い込まれていた俺は唾を飲み込み返す言葉を見失った。
「僅かな縄張りも雌ごと奪われ、俺は行く当てもなく荒野を彷徨っていた。このまま野垂れ死ぬのかと何もかも諦めかけていた。そんな時、風のようにバハラが目の前に現れた。俺はあまりの美しさに自分の目を疑った」
「やったのか？その場で」
「いや。俺は彼女を満足させられる自信が無くて声をかけることすら出来なかった」
バラはグサグサに崩れた顔で笑った。いや笑ったように見えた。
「そして俯いたまま彼女が通り過ぎるのを待った。その時バハラは言った。『私を見て手を出さない雄なんて初めて見たわ。それに背中を丸めて歩く雄も初めて。ライオンの姿は

してるけれノミと変わりないわね。臆病者』さすがに初対面の雌に、正面切って侮辱されたのは初めてだった。無性に腹が立ち、怒りで体が震えた。そして彼女に襲いかかった。どうなろうとかまわない、とことん犯してやる。俺は目を血走らせ吠えたてた。しかしバハラは動じなかった。それどころか澄まし顔で『したいの？そう、やっとその気になった？なら彼処を歩いているキリンを仕留めてみなさいよ。それが出来たなら貴方の好きなようにしても良いわ』言った。しかしそれは俺の力を遙かに越えた条件だった。だがバハラのあざけりの目がどうにも我慢ならなかった。気が付くとキリンに向かって走り出していた。そして何も考えず足に食らいついた」
傷ついた身体から流れ出る血がバラの足下で血だまりになった。それでも彼は話しを止めようとしない。
「いつの間にかキリンが大地に横たわっていた。それに一番驚いたのは俺だった。何が起きたのかもよく理解できず呆然と振り返った。バハラは地面に横たわり微笑んでいた。俺は別の雌を見ているようだった」
昨日のことのようにその時の様子を語るバラ。まるで痛みなど感じていないかのように見える。
「『やっと見付けたは』そう言って鼻を褒めてくれた。『何の事だ？』と訪ねたが答えなかった。俺がこうなったのはそれから、バハラは俺から離れようとはせず居着いてしまった。抱こうとすれば到底無理な獲物を捕ってこい言い出し、嫌な顔をすれば口汚く罵しられた。すると怒りに駆り立てられ不思議なくらい凶暴になれた。そんな事の繰り返し、気づくといつの間にかこんな雄に変わっていた。多分、いや間違いなくバハラがいなければ俺はひ弱なライオンのまま、とっくの昔に死んでいた。だから負けて死んだならバハラになんと言って笑われるかわからない。それが悔しいのさ」
「あんた、あの雌に良いように使われただけだろ」
「自分の立場がまだ解らないのか？」
「ああ、わからないね」
「バハラにとってお前は、俺を強くさせる為のキリン役なんだよ」
「そうかな？今度は、あんたがその役かもしれないだろ。要するにただ強い雄を渡り歩きたいだけじゃないのか」
「お前に言っても仕方ないがバハラは情の濃い雌だ、俺は感謝している」
「笑えるな、何が情が濃いだ。だいたい今更、そんな体で何が出来る。立っているだけでもやっとなんだろう。逃がしてやるからもう止めろ」
実際は逃げだしたかったのは俺だった。どんなに傷ついていても息があるうち、バラは何をするかわからない。このまま自分の前から消えてほしかった。
「言っただろ。お前に背を向け一歩でもこの山を下ったなら、俺は昔に逆戻りしてしまう。それは死ぬより屈辱的な事だ。だから俺はお前を殺し、生きてバハラの元に帰る。・・・帰らなくちゃならない」
そう言い終わらぬうちに、大粒の雨が降ってきた。見上げると黒雲の中から何本もの稲妻降り注ぎ、山々に突き刺ささっていた。凄まじい爆音が大地を叩き岩山を揺さぶる。バラの姿は閃光に浮かび上がりさらに大きく見えた。今度こそ本当にやられる。吹き荒れる風がバラのたてがみを巻き上げた。まるで炎のようにメラメラと揺らめいた。

「逃げろ、さあ逃げて見ろ。俺はお前を殺す」
牙の折れた口でバラは吠え立てた。あまりの気迫と恐ろしさに俺は後ずさりしていた。１歩・２歩・３歩、彼の鋭い目が更に凄みを増した。俺の足は止まらなくなった。そして終いにはとうとう背を向けて逃げ出した。岩を飛び越え山を駆け下りた。後ろなど振り返らず転げ落ちる石のように走った。背後からバラの足音が追いかけてくる。
「何故あんな身体で走れるんだ」
俺は気が狂ったように喚き立てた。
「もうすぐだ、もうすぐお前の背中に飛びつくぞ、さあどうする、逃げろよ」
稲妻は辺り構わず落ち行く先を邪魔した。しかし立ち止まれない。俺は幾重にも重なる閃光をすり抜け走り続けた。そして要約、麓の平地が見えてきた。その時、さっきまでバラが座っていた洞窟の前で何かが動いた。ライオンの子供だった。
「イサク、出てくるな、中に入れ、早く」
急にバラの声に余裕が無くなった。イサクという子供は何事が起きているのか理解できず、目を丸くしてその場に立ちすくんだ。雷鳴のせいでバラの声が聞こえないのだ。俺は進路をその子供に変えた。
「子供は止めろ」
生き延びるにはこれしかない、バラの悲痛な叫が俺にそう確信させた。一目散に子供に駆け寄ると首の後ろを噛み、近くの岩に飛び乗った。すぐ後ろは谷、逃げ場所は無かった。子供は苦しそうに足をばたつかせ泣いた。追いついたバラはじっと俺を睨んだ。飛び出た腹の骨の周りは血だらけだった。父親の痛ましい姿を見て子供は脅えた。
「その子は体が弱いんだ、放してやってくれ」
俺はくわえたまま顔を横に振った。バラは頭を地面にこすりつけた。その時だった洞窟の方から声がした。
「お父さん、どうしたの」
「お前達は出てくるな」
バラが怒鳴ったが何匹もの子供がゾロゾロと暗い穴から這いだしてきた。どの顔にも泥がベタッリと付いていた。
「父さんその傷・・・」
子供達は傷ついた父親の元に近寄り血を舐めはじた。
「お前達、父さんの言う事が聞けないのか」
悲しそうな目でバラは子供達を見た。そして俺を振り返り言った。
「お前にとっては名声を上げる為の戦いかもしれない、しかし見ての通り、俺はこの子供達も守らなくちゃならないんだ。バハラとやっと築いた家族なんだ。奪わないでくれ。頼む」
イサクという子供はクンクンと鼻を鳴らした。そしてバラに向かって手足をばたつかせた。俺はくわえていた子供をおろし逃げられぬよう右足で押さえつけた。
「俺はあんたが恐ろしい」
もう強がりを言う気力は残っていなかった。ただ死にたくないと言う本能だけになっていた。
「その子を返してくれたなら殺しはしない」

その言葉をそのまま受け入れられるような状態ではなかった。体中の震えが止まらないのだ。
「この子は安全な場所までつれていく。近寄ったら首の骨をへし折る」
子供の首を噛み持ち上げた。どこへ連れて行かれるのかとイサクという名の子ライオンはは必死に暴れた。
「やめろ」
バラが叫んだその時、子供が俺の傷ついた右目を蹴った。激痛の余りくわえていた子供を放り投げてしまった。小さな身体は岩の上を転がり谷へ落ちそうになった。それを見たバラは俺を押しのけ子供を助けようと飛んだ。間一髪、右足一つで崖にぶら下がり左足だけで子供を抱き留めた。しかし弱っている彼にははい上がる力は残っていなかった。父親の腕に抱かれた子供は嬉しそうにバラの鼻を舐めた。谷を渡る風が親子を揺らした。バラは自分の左足にイサクを載せ俺の前につきだした。
「この子を助けてやってくれないか、俺は...」
「お前が俺なら助けるか？」
俺は聞き返した。バラは言葉を詰まらせた。しかし俺は思った。彼なら助けたかもしれないと。それ程子供を見る彼の目は静かで暖かかったのだ。タカタカの言うとおり力だけではない真の強さを感じた。それに引き替え俺は口先だけの臆病者に成り下がった。早く全てを終わらせこの場を立ち去りたかった。
「他の子供達はどうするつもりだ」
死を予感したバラは子供を自分の胸に引き寄せた。そしてしっかりと抱きしめると血だらけの顔でほおずりをした。助かるのだと疑わない子供はくすぐったそうに目を閉じた。
「決まっている、掟に従うまで」
戦いに敗れた雄の子は皆殺しするのが掟。そうしなければ反対に子供に復習されてしまう。仕方のない事だ。更にもう一つ子殺しには重要な意味があった。それは雌にあった。彼女たちは前の夫の子供が生きているうちは次の雄を受け入れない。自分の子孫を雌に植え付けようとするにはどうしても前の雄の子供を殺さざるを得なかった。
「そうだろうな...、一つだけ頼みがある」
力尽きようとしているのか、バラの身体が小刻みに震えだした。
「バハラに伝えてくれないか」
痛みに歪んだ顔で彼は声を振り絞った。
「お前に出会えて毎日が楽しかった。ありがとうと言っていたと」
俺は首を振った。
「あんたを忘れられないと困る」
「そうか・・・しかしお前の様な奴にあいつを預けなきゃならないなんて、やはり助けるんじゃなかった」
バラが言い終わらないうちに、俺は岩を掴む彼の右足を踏みつぶした。骨が砕ける鈍い音がした。足は岩からはずれ巨体は岩を離れた。バラは大事そうに子供を抱え落ちていった。彼らの顔は微笑んでいるようにも見えた。まるでこれから、じゃれあおうかと見つめ合っているようだった。しかしそれもほんの一瞬、一つになった親子の身体は暗い谷の底へ消えた。俺は耳を澄ませた。バラは本当に死んだのだろうか？又さっきのように登ってくる

かもしれない。谷底の闇にバラを探した。
姿無き彼の存在に俺は怯えた。鳴り響く雷の轟音が彼の雄叫びに聞こえる。恐怖心は収まるどころか増幅していく。そしてついに俺は残された子供達に対し牙を剥けた。子殺しの掟など無関係だった。自分が犯した恥ずべき戦いを誰の記憶からも消し去りたかった。だからこそ一部始終を見ていた子供達の澄み切った目が耐えられなかった。濡れた身体を寄せ合い震えている子供達。その小さき命を狂ったように同じ谷へ投げ込んだ。必死に抵抗しようとする者。悲痛な声をあげ逃げまどう者。しかし谷へ突き落とされた途端、どの子も母親の名を呼びながら雷より鋭い悲鳴を耳に残し消えていった。そして最後の一頭を投げ込むと俺は地面に崩れ落ちた。
「なんとまあ、お粗末でしたねえ」
どこかからタカタカの薄ら笑いが聞こえた。声のする方に目をやると洞窟の上の枯れ木に止まりこちらを見ていた。
「子供を囮にして生き延びようなんて。往生際の悪い、薄汚いライオンだ」
ゆっくりと、そしてなぶるような物言いでののしられた。
「つまりは、自分より弱い相手としか戦ってこなかったという事ですよ」
俺は言い返す事もできず、じっと雨に打たれ続けた。
「しかし貴方の愚かだったのはそんなことじゃない」
「・・・」
「解りませんか？」
「なんだ」
「自分の強さを一度たりとも疑わなかった事ですょ、しかしバラは違った」
自分の強さを疑う？しかし、強くなる事だけが雄の宿命じゃないのか？
「あんな傷なら普通死ぬだろ。奴はライオンじゃない、異常だ」
「始めから言っておいたはずですよ。今更そんな事・・・言い訳以外の何ものではない」
「じゃあいうが、あいつは死に俺は生き残った」
「ふふん」
ハゲタカに鼻で笑われた。
「死んだのは貴方の威厳でしょ？反対にバラは勇敢な雄として生前にも増して知られる事となる。結局、貴方を恐れる雄などいなくなり、生き恥をさらして生きるしかなくなりますね」
それを聞いて急に恐ろしくなった。タカタカの言うとおりだ。そんな屈辱は断じて受け入れられない。
「子供は全て殺した。お前さえ黙っていれば俺はバラを倒した英雄でいられる」
「そんな風に生きて惨めじゃありませんか？第一貴方のような雄の為に働いた自分が情けない」
話を聞くのも嫌だとタカタカは首を降った。たかが禿げ鷹一羽にここまで言われる自分とは何なのだろう。口に溜まっていた血を吐き出した。
「ならさっさとここから去ればいい。どうせ俺の顔など見たくないんだろう」
「じゃあ約束の物を下さいよ。このままじゃ私は苦労しただけで何の得もない」
「バラは谷底だ、欲しいなら降り喰ってきたらいい」

「こんなに深い谷へ降りていったら私が死んでしまう。行くなら貴方が行って来たらいい」
「いい気になるなよ、俺のおこぼれで生きているくせに」
「それを言うのはこっちの台詞です。このままで済むと思っているのなら大間違いですよ」
「何が言いたい？」
「私の為にいつも餌を用意して下さい。それも一生です。それなら見た事は誰にも話しません」
「卑怯だぞ。俺を脅すつもりか」
「そんな事を言えるのですか？なにもかも貴方の傲慢さが産んだ結果でしょ。黙ってて上げようと言うだからありがたいと思いなさい。もし私の口を封じようと妙な素振りでも見せたなら洗いざらいぶちまけますからね、これからは私が貴方の主人だ。よーく思い知るがいい」
タカタカは喉をひくつかせながら笑った。あまりに屈辱的すぎて俺は動けなくなっていた。
「どうして貴方がここにいるの？バラは？」
振り返るとずぶぬれになったバハラが立っていた。彼女は辺りを見回した。
「ねえ、子供達はどうしたのよ」
彼女は洞窟へ駆け寄り子供の名前を呼んだ。暗い洞窟の奥からは何の返事も帰ってこなかった。
「みんな、あそこですよ」
タカタカは彼女の前に舞い降り暗い谷底を示した。
「誰も生きちゃいません」
「嘘よ、だって亜主がついていたはずよ。彼がいてそんなことになるはず無いは」
「嘘なんかじゃありません。ここにいるムブユがイサクという子供を」
その先を言おうとするタカタカ言葉を俺は遮った。
「俺が殺した。お前の望み通りにしてやったまでだ。そう、ついでに子供達も谷へ突き落とした」
彼女は両目を見開き怒り出した。
「冗談言わないでよ。貴方なんかに負けるわけが無いじゃない。彼が死ぬなんてありえない」
タカタカは待ってましたと言葉を割り込ませた。
「確かに貴方のバラは強かった。しかしこのムブユというズル」
そう言いながら、タカタカは左目で俺の様子を伺った。
「何、言いなさいよ」
彼女はタカタカに詰め寄った。
「わかった、だからそれ以上話すな」
「一体何があったのよ、早くバラに逢わせて。子供達を返してよ！！」
「本当ですね？」
タカタカは念を押した。俺は小さく頷いた。それを見た奴は途端に態度を変えた。
「認めたくないでしょうが、ムブユさんの方が強かったんです。今は谷の底でお子さんと一緒に息絶えています。これは紛れもない事実であり、貴方のご主人はたった今、ムブユに変わったのです」

彼女は尾を地面に引きずり、フラフラと谷へ向かって歩き出した。耳は垂れ下がり、虚ろな目はどこを見るでもなく宙を彷徨った。次第に強さを増す雨は風に押され俺たちの頬を叩いた。
「バラが私を置いていくなんて、そんな...」
「殺してくれと君が言ったんだろ」
彼女は激しく頭を降り、泣きながら足を鳴らした。
「貴方なんかが欲しかったわけじゃない。ただ私を守ろうとするバラを見ていたかっただけ。それもこれも、もっと彼に愛して欲しいかったら」
バハラは小石につまづき谷へ落ちそうになった。俺は駆け寄り彼女を抱き寄せた。
「やめて、私もいくの」
バラは目を真っ赤に泣きはらせて俺を振りほどこうとした。
「もう俺の雌なんだ、それ位のこと分かってるだろう」
俺はバハラを離さなかった。彼女はうなだれたままぽつりと呟いた。
「ねえ、彼は本当に貴方に負けたの？」
タカタカは俺の口をジッと見た。きっと”嘘を付く口”とはどんなふうに動くのか興味があったのだろう。
「俺はそんなに弱そうに見えるか？」
「あなたはそんな事に拘るでしょ？でも彼は違うの。『ああ、いいよ』と安心されてくれる。そしてその言葉通りどんな望みも叶えてくれた。逞しいバラは私の自慢になった」
「それは君から見たバラだろ。彼は教えてくれた。『本当は怖いんだ』とな」
「彼のように強い雄が何を怖いというのよ？」
「君さ」
「何を言ってるのよ」
「『負けた途端、昔の弱い雄に戻ってしまう。彼女はそんな俺に失望するだろう。それが一番怖い』と、だから奴は君の無理な望みを必死に叶えようとしたんだ」
「嘘よ、無理矢理押しつけた事なんてなかった。嫌ならそう言うはずよ」
「断る事が出来ないようにし向けたのは君だろ。奴が聞いたらさぞかし悲しむだろう」
「だって、本当は彼、始めから強かったのよ。ただそれを気づかなかっただけ。私はバラに駆けたの。彼ならきっと幸せにしてくれるって。そして彼はその通になった。正真正銘勇ましい雄になり、私以外、彼を恐れて近寄らなくなった。そして強くなる程に優しさは深まっていった。なによりそれが嬉しくて仕方なかった」
彼女は現実を一瞬忘れ、胸に溜め込んだ喜びを懐かしもうとした。しかし俺はその暇を与えなかった。
「だが結局、君の言う優しさがバラを殺した。違うか？、死に際に彼は悔やんでいた。俺など助けるんじゃなかったと。つまりバラを殺したのは君じゃないのか」
彼女自身に責任を押しつけた。
「私が彼を殺した...」
否定しようと必死に頭を振ろうとするが、体が小刻みに震え思うようにならない。空を幾つもの閃光が続けざまに走った。俺は目を谷へ向けた。その時、岩の裂け目に頭を挟んだままぶら下るライオンの子供を見つけた。バハラもそれに気づき谷へ身を乗り出した。

「坊や」
悲痛な母親の叫びが向かいの岩にぶつかり、更にあちこちに跳ね返った。いくら呼びかけてもぴくりともしない。死んでいる事は明らかだった。それでもバハラは我が子を必死に呼び続けた。そんな彼女に見せつけるように疾風が小さな体を揺らし弄んだ。そしてついに頭から胴体だけをもぎ取った。
「いかないでー、いやー」
絶叫が風を切り裂いた。頭のない体はあっという間に谷底へ消えた。地面にうち伏し号泣するバハラ、タカタカはそんな彼女を見ながら言った。
「彼女を慰める事もなく、さらに深い後悔へと追いやるなど、なんと卑劣な雄・・・いつか必ず報いを受けるぞ」
ハッとした。自分の自信は無意味で恥ずかしい奢りだったと要約気づいた。
「私を独りにしないで」
バハラは地面に飛び散った血に鼻を押しつけ何度も奴の名を呼んだ。俺はもっと激しく雨よ降ってくれと願った。彼女の悲鳴をかき消して欲しかったのだ。

バラが死んだその日の内に俺はバハラを犯した。いくら拒んでも、汚い言葉で罵られても止めなかった。はやく彼女の身体からバラの臭いを消し去りたい。そして彼女の記憶を閉ざしたかった。俺は何日も何日も彼女を離さなかった。一夜明ける毎にバラの目から精気が失せていった。憎しみが悲しみに変わり、後悔が諦めという嘘をついた。バハラはそれから一言も言い返えさなくなった。抱きたいと言えば自ら横たわり、餌を捕ってこいといえばその通りに出かけた。彼女は在り来たりの雌になってしまった。初めて彼女と出会ったとき感じた、あの美しさや気高さは何処にも見あたらなかった。こんな雌が欲しかった訳じゃない。俺は苛立った。いつしかバハラとの間にピリピリとした風が吹くようになったそんな時、彼女は伏し目がちに言った。
「赤ちゃんが出来たみたい」
「本当か？」
「たぶん」
俺は天を仰いだ。タカタカの言うとおり、罰を受けると疑わなかった俺に子供が出来た。許されたと感じた。
「望みが叶ってうれしい？」
バハラは口惜しそうに俺に聞いた。
「当たり前だろ」
最近、俺は彼女に対し鬱陶しさを感じていた。しかし子供が出来たと聞いた途端、彼女を抱きしめずにはいられなかった。
「君から何もかもぎ取ってしまった俺なのに... ありがとう」
後悔を引きずりながら暮らしていた俺にとって、頭の上の分厚い曇が一気に去っていったような気分だった。だからこそ躊躇いもなく”ありがとう”などという一度も言ったことのない言葉を口に出来たのだろう。恐らく精神的に追いつめられなければ、一生その言葉

を使う事はなかっただろう。喜びで今にも泣きそうな俺をバハラは一瞥した。
「仕方ないは、雌の身体は誰の子供であろうと関係なくこうなるのよ」
意外な言葉だった。雌は身ごもれば嬉しいんじゃないのか？
「俺の子を産むのはいやなのか？嬉しくないのか」
俺の目は無意識に瞬きを繰り返した。バハラは気怠そうに身体を地面に横たえた。それはまるで邪魔な物を放り出すような
振る舞いに見えた。
「嬉しいかと聞かれても、頷けないはね」
バハラは複雑な顔で自分の腹を眺めた。
「でも私の子には違いなのよね、この子も... ねえ？父親になりたい？」
「なるもならないも、俺の子だろ」
「やっただけじゃない」
あえて下品な言葉を使っているように見えた。
「だから？どうだと言うんだ」
「私は貴方を父親と認めていないの。だから産むとも決めていないってことよ」
俺は息をのんだ
「何故だ」
「当然でしょ、貴方が私に一度でも優しさをくれた事があった？ないわ、ない、なにもないじゃない。そんな相手を父親とは認められる？無理よ。だから産みたくないの」
「バカ言うなよ、出来てしまった物、もうどうにも出来ないだろう」
それを聞いた彼女はあきれ顔で大きなため息をついた。
「あなた達雄は雌の躯を何も知らないのよね」
「腹の中で子供作れるんじゃないのか」
「所詮その程度よね」
「ちがうのか？」
「寂しくて、辛くて、苦しい日々が続けばお腹の子は大きくならない。それに些細な事で水のように流れていくわ」
「それは絶対にだめだ」
俺の焦りを嘲笑うバハラ。
「私はむしろそうなって欲しい。貴方のために産みの苦しみを味わうなんて馬鹿らしいの」
話すほどにバハラの感情は冷たさを増していった。聞いている俺はその言葉にがんじがらめにされていった。
たまらずバハラに手を挙げそうになった。すると彼女は怯えるそぶりも見せず俺を睨んだ。
「やりなさいよ、さあ、私も子供も殺せばいいわ」
振り上げた手が固まった。
「くっそ・・・」
何も出来ないと見切ったバハラは俺の手を払いのけ、尚も大胆に身体を伸ばした。安心しきったと言うより怖い物など何もないといった太々しい態度にみえた。
「どうしたらいい、どうしたら俺の子を産んでくれるんだ」
「言ったはずよ、それを考えなさいって。分からなきゃお腹の子はこの世から消えるだけ

のことよ」
結局、それ以上彼女は何も言わなかった。俺は目をつぶって険しい谷を歩くように答えを探した。どうやったら彼女は俺の子を産んでくれるのか？生まれて初めて雌の為に何をしたらいいか思い悩む日々が始まった。

「しらじらしい」
バハラは俺が彼女の為にする事をことごとくけなした。怒りに何度食ってやろうかと思ったかしれない。しかしじっと耐えた。狩りも自分が行くようにした。片目でも鹿や水牛ならなんなく捕また。彼女は何も言わずにそれを食べた。しかしそれも少しずつ変わっていった。何を食べたいと聞いても答えなかった彼女がその日の好みを言うようになった。そういわれると嬉しくなって、張り切って狩りに行った。そして注文通りの獲物を捕ってくるとその内
「ありがとう」
と言ってくれるようになった。日に日に彼女の笑顔が増えていき、それが見たくて俺は尽くすようになった。
そして三日月がその身体を丸く太らせる頃になると、バハラの口から屈託のない笑い声が漏れるようになった。気が付くと、自分の事を彼女に話して聞かせる俺がいた。彼女も自分の幼いときの話や、父親や母親のを話した。たまに話の流れで死んだバラとの思い出に触れそうになる事があった。しかし彼女はいつも寸前で言葉を飲み込んだ。そうされるとかえって気になった。本当にもうバラの事はいいのだろうか？それを確かめたくて敢えて会話をそちらに向けた事もあった。ある日、又そのような気まずい雰囲気になった。彼女は腹をさすりながらさらりと言った。
「まだ彼の物だった昔の私が気になる？」
「そんな事は言ってない。ただ君と... こうやって親しく笑って話せるようになると、本当は何を考えているか知りたくなる」
「貴方は私達が親しくなったと思うの？」
驚いた目で彼女は俺を見た。俺は反対に目を伏せた。
「俺の勘違いだと言いたいのか」
「親しというならなぜ聞けないの？いつも遠回しな言い方ばかりしておかしいじゃない。それとも本当の気持ち知るのが怖い？」
「君も同じだろ、いつも黙り込むじゃないか」
「当然でしょ、じゃあなんて言って欲しいの、今でもバラが好きだとでも言って欲しい？貴方それを聞いて嬉しい？お腹を蹴る子供に夜も昼も眠れない私にどうしろっていうのよ。私は自分で答えを選べないの。それでもまだ私からなにかを絞りたいというなら、本当に死ぬしかないは」
突拍子もない鋭い言葉。俺は笑って誤魔化した。
「そんな脅かしはもうよしてくれよ、子供も死んでしまうだろ」
「貴方の本音はそれよね。なら子供を産み終わったら私の役目は終わり？なら、それでもいいわよ」

そんなつもりで言った訳じゃない。けれど出産間近で過敏になっているのに気づいていたにもかかわらず、不用意な言葉を口にした自分をまだまだだめだと悔やんだ。
「俺の側にいてくれ。やっと笑ってくれるようになったんだ。ずっと君とこうしていたいんだ」
「なら私の事を解ってよ。時間がかかっても彼の事を忘れさせて。貴方しかいないんだから」
「悪かった。もう言わないから」
「なら安心させて」
俺はバハラを抱き寄せ、彼女の高ぶった感情を沈めようと顔を丹念に舐めてやった。気持ちよさそうに目を閉じ喉を鳴らすバハラ。そうしているうちに彼女はすやすやと寝息をたて眠ってしまった。勝手に怒り勝手に機嫌を直した様なものだが、おかしな事に俺はそんなバハラが可愛く思えた。そしてそれから俺はバラの話をする事をきっぱりと止めた。止めたというより彼女にといる事が素直に楽しくて話題に事欠かなくなったのだ。すると不思議、身重の体だというのにバハラはどんどん綺麗になっていった。

長かった雨季もようやく終わろうとしていた。高台の住処から眺める大地はその姿を一変させていた。枯れ果てていた大地は一面の草で覆われ、バオバブの木は重たそうなほどの枝に葉を茂らせていた。時折刺す薄日に梢では鳥たちが羽根を広げ身体を暖めている。驚いた事にあれ程乾ききってひび割れていた大地に川が出来た。降り続いた雨が遙か遠くにあった川を引き寄せたのだ。当然の如く、その川を辿り様々な生き物がやってきた。キラキラと背中を光らせ泳ぐ小魚や、水面に目を覗かせ獲物を待ちかまえるワニ、水草を食べながらいつの間にか眠っているカバ。そして気持ちよさそうに水浴びをする象達。誰もが曇った空を見合げ『もう雨は十分だ、早くあのギラギラした太陽が見たい』と思った。いくら水があっても日の光がなければ命は育たない事を誰もが知っていた。
「ねえ、もうそろそろ産まれそうなの、独りは怖いから側にいて」
狩りに出かけようとする俺を見て彼女は言った。
「心配しなくて言い、暗くなる迄には戻るから」
バハラの腹は今にもはち切れそうな程ふくれ、いつ産まれてもおかしくない状態だった。
「やっぱり行くの？」
「ああ」
「タカタカにあいにいくのね、お願い。今日は止めて」
本当はそうしてやりたかった。しかし子供が産まれる前にどうしてもやっておかなければ成らない事があった。タカタカを始末だ。秘密を握られたあの日から奴は俺を顎で使うようになった。初めは数日に一度、奴の為に餌を捕ってればよかった。しかし近頃はそうもいかなくなった。毎日新鮮な肉を欲しがるようになり、事細かく獲物も指定するようになった。当然それはバハラに秘密だった。もし彼女が知ったなら何故そこまでするの？と訳を聞くだろう。バハラの世話に忙しい俺は、時折彼の申し出を断らざるを得なくなった。するとわぞわざ住処にやってきて皮肉たっぷりの冗談を俺に言った。しかもそれは俺にではなくバハラに聞かせる為だった。

「あんまりいい気になるなよ」
俺はバハラに聞こえぬよう囁いた。
「私はいいんですよ、本当の事を話しても」
タカタカは俺が飛びかかれない場所にいつもいた。奴の表情は『いつでも御前の秘密などばらしてやる』と言いたげだった。あまりに横柄な態度にバハラはタカタカ疎んじ嫌悪感をあらわにした。
「彼とつき合うのは止めて。貴方を馬鹿にしたようなあの口の利き方、何故怒らないの？何かあるの？」
バハラは矢継ぎ早に俺に言葉をぶつけた。出産間際で気も高ぶっているせいもあるのか彼女が俺を睨む目はいつになく険しかった。
「ここまで連れてきてくれたのは彼なんだ。君は気にいらんないかもしれないがあれでも友達なんだ」
バハラは首を振った。
「あいつが友達？冗談でしょ。あなた達が楽しそうに話しているところなんて見た事もないは。だいたい貴方いつも顔を引きつらせて黙り込んでいるじゃない。それに貴方のいないときなんか彼、酷い声で”お幸せそうに...”って笑いながら言うのよ。とにかく気持ち悪い。タカタカの声聞くと体が痒くなるのよ。お願いだから追い払って」
このままでは彼女がいつタカタカに襲いかからないとも限らない。もしその時彼の口から秘密が吐き出され出もしたら元も子もない。そうなる前にタカタカを殺さなくては。俺は首を絞められるような息苦しい日々に我慢できず、いつしかタカタカを殺す事を考えるようになった。そして俺は名案を思いついた。
「そんなに怒るな。心配しなくても彼もそろそろ産まれ故郷へ帰りたいらしい。だから逢う事もなくなるよ」
「そうなの？」
「ああ、俺も君が不機嫌になるのを見ていたくはない。だから引き留めるような事はしないよ。しかし彼に故郷の仲間達にも伝えて欲しい事が色々あるんだ。子供が産まれたらゆっくり話しもしていられないだろう。だから今のうちに話してくるよ。いいだろ？」
俺はバハラの頬を何度もなめた。少し安心したのか彼女は仕方ないと頷いた。
「ウサギでも捕ってきてやる。食欲のない君でもあの柔らかい肉なら喉を通るだろう。だからおれが帰ってくるまでいい子に寝ていな」
そういうと俺はバハラが横になっている草を整え砂を払った。
「何もいらない。だから早く帰ってきて。いやな事が起こりそうな気がするから」
「困ったな。いつから君はそんなに弱虫になったんだい？」
俺は笑って見せた。しかしあれほど沢山バラの子を産んだ彼女が何故そんなに神経になるのか俺には解らなかった。甘えて見せているだけなのだろうか？だが彼女にそれを聞く事はしなかった。子供を産むと言う事事態本当はよく解っていなかったし、聞いたとしても自分が理解できるとは思えなかった。下手に聞いてそんな事も解らないのかとまた軽蔑されるのも悔しかった。俺は彼女を岩ノ下の窪みに残し住処を後にした。今にも消えそうな薄曇の隙間から太陽が顔を覗かせていた。あと数日で雨季は終わると悟った。

タカタカは丘の大木の枝で羽根を広げ、毛繕いをしていた。黒く細かい羽根がハラハラと風に揺らめきながら目の前に落ちてきた。俺は泥だらけのネズミを木の下に放り投げた。タカタカはそれを見ようともしなかった。
「おい、餌を取ってきたんだ。何とか言えよ」
顔になま暖かい物が落ちてきた。とても嫌な臭いだった。俺はそれをぬぐった。タカタカの尻から吐き出された糞だった。
「雌の子鹿と言ったはだ。それの何処が子鹿なんだ？」
確かに奴の希望は産まれて間もない雌の子鹿だった。
「何処を探してもいなかったんだ。仕方ないだろう」
「ウサギならまだしも、そんなに小さくて、臭くて、汚い物は食べられる訳がない」
タカタカが野ネズミを好まない事は承知の上だった。だからこそ敢えて嫌いな物を捕まえてきた。
「これは私に対しての嫌がらせか？ムブユ」
空腹なのか奴は相当苛立っていた。いつも自分の為に用意される餌があるせいで、奴は俺が捕った獲物以外の肉を食わなくなっていた。もう、他の禿げ鷹と争いながら食事をするのが面倒になっていたのだ。そして一度怠け癖がついてしまうと、もう空へ羽ばたくのさえ億劫になっていた。
「我が儘を言うなよ、これでも食えない事は無いだろう」
「何だ？その態度は？まるで私が物を恵んで貰っているような言い方じゃないか、いいのかい？彼女に知られても」
その言葉はタカタカの決まり文句になっていた。もう聞き飽きた。言える物なら言って見ろ、言ったが最後、お気楽な生活を捨てなくてはならないのは奴自身だ。しかし俺は反対に大げさに脅えて見せた。
「わかったから。それだけは許してくれ」
「おまえは馬鹿じゃないのかい？何度も何度も同じような事を繰り返し、私を怒らせて」
タカタカは唾を吐き、羽を広げた。その姿は如何にも自分が俺より上にいると言いたげだった。
「・・・」
気づくとハイエナが野ネズミを近寄ろうとしていた。俺はハイエナを睨み付けた。ハイエナは目で訴えた。”どうせいらないんだろう？”。俺が首を振ろうとすると、タカタカは怒鳴った。
「そんなものくれてやれ、おまえもぐずぐずしていないで早く探してこい」
俺は野ネズミをハイエナに向かって蹴った。泥だらけの死んだネズミは地面を転がり、真っ黒な固まりになった。
「よかったな、いらないとさ。持って行けよ」
ハイエナはそれをくわえ足早に逃げていった。それを目で追いかける俺に奴は怒鳴った。
「何をぐずぐずしている。おまえも早くいくんだよ。役立たず」
怒りに伸びる爪を何とか押さえ、俺は自分の言葉を飲み込みんだ。

「これほど言われても怒る事も出来ないでいるなんてな。それほどあの雌がいいのか？まったくだらしない」
「おまえに俺の気持ちなど分かるものか」
そう言うと俺は背中を丸めその場を去った。
「臆病者だけのライオンじゃねえか」
うすら笑うタカタカの声が垂れ込めた曇に吸い込まれていった。

再び俺がタカタカの前に現れたのは、日も暮れかかろうとする頃だった。空腹にやられ奴は木の上でうなだれていた。
俺は息絶えた雌の子鹿を背中に乗せ、急ぐ事もなく丘を上がってきた。
「ほら、ご所望の獲物を捕まえてきたぞ」
「遅い、遅すぎる。一体いつまで待たせたら気が済むんだ」
タカタカは息も絶え絶えに言った。
「そういうな、増水した川で足止め食らってな、遠くまで足を伸ばしやっと一頭捕まえてきた。ほら雌の子鹿だ。これでいいんだろ」
小さな鹿の身体を地面に放り投げた。ドサリと言う音とともに鹿の細い足がダラリと地面に広がった。そして俺はこれでいいかと木の上を見上げた。
「何をしている、そこから離れろ、邪魔だ」
捕まえられるのを警戒しているのだ。俺は素直に言う事を聞き丘の下まで降りた。それを確かめた奴は落ちるように鹿の上に降りた。相当腹が空いていたのか息つく間もなく鹿の腹にクチバシを突き立てむさぼった。皮は汚く裂け、肉片があちらこちらに飛び散った。あまりに乱暴に食い散らかすせいで子鹿の細い足はまるで生きているようにビクンと反応した。全て自分の餌だからどう喰っても良いだろうという行儀の悪さに俺は呆れた。しかし血で赤く染まっていく奴の顔をみると内心可笑しくて成らなかった。俺は地面に腰を下ろしゆっくりと食事風景を眺めた。そしてどれ程そうしていたかは分からないが薄曇りの空がほんのり赤く色づき始めた頃、突然タカタカがもがき始めた。
「あぅぅぅ」
口から泡を吐いたかと思うと今食べたものを戻した。俺の口は笑いを隠せなかった。のたうちまわりながらタカタカは叫んだ。
「おまえ一体何をした...」
「一味くわえただけだ。どうだ美味いだろう？」
俺は子鹿を見つけたがすぐには殺さなかった。親から引き離し薄暗い岩陰に追い込んだ。そこには雨季にしか生えない黄色い苔がビッシリと地面を覆っていた。子鹿は命乞いをしながら震えた。俺は呼吸を整え落ち着いた口調で言った。
「そんなに怖がるな。そこに生えている苔を食べたなら許してやる」
苔は強烈な毒をもっていた。一口食べただけで手足はしびれ立つ事さえ出来なくなる。そのうちに痙攣を起こしもがきながら息絶える。生まれて何日も経たない子鹿はまだその事を親から教えられていなかった。何も疑ず子鹿は黄色い苔を食べた。そしていくらもしないうちに白目をむき苦しみ始めた。俺は近寄って苔を吐き出そうとする子鹿の口を前足で

押さえ付け塞いだ。吐き出せずに逆流した苔が喉につまったのだろう、息の出来ない子鹿は激しく暴れた。しかしもがけばもがく程、毒は身体に回っていった。そうしているうちに小さな体は動かなくなった。押さえていた前足をのけると子鹿の口がハクリと開き、中から赤い舌がだらりと垂れた。俺は狩りで捕まえたように子鹿に傷をつけた後、ここまで運んできた。
「卑怯だぞ」
タカタカは苦しそうに羽根をばたつかせた。鹿に残っている毒が奴の体の中を回り始めたのだ。
「遅いよ、注意しなかったおまえが悪いんだ」
「こんな事をしてただで済むとおもうのか」
血走った目でタカタカは声を振り絞った。
「死にゆくおまえに何が出来る。やれるものならやってみろ」
俺はタカタカに近づいていった。しかし奴はもう逃げる事も出来なくなっていた。
「正々堂々と殺すならいざ知らず、おまえは又も卑怯な手で俺を葬り去ろうとしている。どこまでも汚いライオンだ」
「おまえなんかに何を言われようとも構わないさ」
羽根をくわえ足でへし折ってやった。骨が折れる鈍い音、毒の苦しみと折れた骨の痛みで奴は絶叫した。
「これで終わりだ」
タカタカの長い首に尾を巻き付け引き寄せた。そして息の根を止めようと首を折ろうとしたその時、奴はかすれ声で言った。
「必ず復習してやる」
そう言い残すと、顔を苦痛にゆがませ息を引き取った。途端にタカタカはずしり重くなった。持て余した俺は死骸を放り投げた。
「なにが復習だ」
もう秘密を知る者はいない。これでおどおどしながら暮らさなくていい。あとはバハラと生まれくる子供達と楽しく暮らそう。
「終わった・・・」
最近、自分でも変わったなと思う。その証拠に傲慢な夢を吐かなくなっていた。それに、前のような乱暴な自分の言葉に違和感を感じていた。強い雄を演じているような気がしてならないのだ。俺はタカタカの死骸を増水した川に流し、逃げるようにバハラの元に帰った。

帰り着いたのは既に日が落ちた後だった。空にはこうこうと満月が輝き、その周りを取り囲むように幾千もの光が瞬いていた。もう雨雲らしきものは何処にもなかった。たぶん明日には待ちこがれた太陽が姿を現すだろう。俺は約束したウサギをくわえ池の前を通り過ぎた。すると草むらの向こうから俺を呼ぶ声が聞こえた。
「ミブユ、来て。産まれそうなの」
その声には只ならぬ緊迫感があった。ウサギを放り投げバハラのいる岩へ駆けた。そこに

は岩に寄りかかりうなり声を上げるバハラがいた。月明かりに照らされた身体から湯気が立ち上っていた。ぶるぶると震える後ろ足。腹は波打ち得体の知れない水が一気に尻から吐き出された。何をしてよいのか解らず彼女の背中をなめた。暫くすると尻から小さなつま先がニョキリと現れた。尻尾が二本余計に生えたような不気味な姿だった。正直、恐ろしかった。
「つま先が見えたぞ」
突如、ハハラは絶叫した。
「あぁぁぁ、なんて事よ、逆だわ」
「どうした？どうした？？」
バハラの顔を見たらいいのか、それとも尻を見ていなくてはならないのか？右往左往焦りまくった。
「ミブユ... 助けて、お願いこのままじゃ、この子も私も死んでしまう」
彼女は今まで聞いた事の無いようなうなり声を発し始めた。おろおろする俺に彼女はすがった。
「子供は足からじゃなく頭から生まれるの、このままにしておいたら、お腹の中で死ぬの、私も痛みに耐えられない。だから、早く引き出して。は、はやくぅぅぅ」
「ひっ、引っ張ればいいんだな？」
「早くぅぅぅ」
尻は血で赤く染まり、身体からはさらにもうもうと湯気が立ち上った。俺は子供の小さな足をくわえた。そして傷つけぬようにゆっくりと後ずさりを始めた。バハラの肉の穴は見るも無惨に引き裂かれていく。痛々しすぎて俺の足が止まった。
「だめだ、できない」
怒鳴声が浴びせられた。
「臆病者、なにしてるのよ、勇気を出しなさい。貴方しか私たちを助けられないのよ」
その言葉に俺は我に返り、子供の足をくわえなおした。するとさっきよりさらに醜く肉穴が広がっていった。しかしもう躊躇うことなく無我夢中で引き続けた。バハラの息づかいか子供の足をつたい響いてくる。彼女と一つなった気がした。
「いい子だから、早く産まれて。そんなに苦しめないで」
空を仰ぎ、祈るバハラの目からポロポロと涙が落ちていた。彼女は息を止め渾身の力を込めた。更に多量の血が両足をつたい地面に流れた。彼女は気を失いかけていた。それもそのはずだった。お腹から出てきた子供は異様に大きかった。彼女は空に向かいあらん限りの声を振り絞った。それと同時に草の上に子供の身体がぼとりと落ちた。バハラは横たわったまま、ピクリともしなくなった。薄い膜に覆われた子供が気味悪く蠢いた。俺はバハラを揺すった。
「おい、しっかりしろ、おい」
白目をむいたままバハラは痙攣していた。このまま死んだらどうしよう。俺は前足でお腹をさすりながら彼女の名を呼び続けた。暫くすると彼女は意識を取り戻し、また俺を叱りつけた。
「私なんてどうでも良いから、その子を、何してるの早く」
おろおろする俺に向かって尚も強く言った。

「その膜を捕って、早く身体を舐めてあげて。息ができずに死んでしまう」
バハラのどこにそんな力が残っていたのかと思う程強く蹴られた。俺は彼女の指示通りに子供を覆っていた膜をはがした。しかし子供はぐったりとしたまま息をしない。
「おい、おい」
必死に子供の身体を舐めた。口にも息を吹き込んだ。背中を叩き。呼びかけ。そして又舐めた。バハラは薄目をあけたまま心配そうに見ていた。もしこの子が死んだらバハラはどうなるのだろう。いくつもの不安が頭の中を駆けめぐった。泣き声を上げてくれ。お願いだから泣いてくれ。俺は子供の身体を抱え舐め続けた。... どれくらいの時が経っただろう。もう諦め駆けていたその時、子供の胸が大きく膨らんだ。だがしかし直ぐに動きが止まった。それを見て俺の呼吸も止まった。いや夜が止まった。一瞬の沈黙が永遠の沈黙に変わろうとしたその時、耳をつんざくような泣き声が夜空に向かって解き放たれた。生まれて初めて聞く命の叫びだった。俺の魂は激しく揺さぶられた。我慢できず、吠え、泣いた。バハラは頷いた。
「坊や、貴方のお父さんよ」
「雄なのか？」
「貴方と同じ物がついてるじゃない」
濡れた産毛をかき分けるとお腹にはアザがあった。そしてそこからほんの少し下、可愛らしい性器が頭を覗かせていた。
「俺の息子か？」
「そうよ」
「いいのか？俺で」
「ええ。今の貴方なら安心してついていけるもの」
バハラは疲れ切った身体を起こし子供を舐めた。産まれたばかりでまだ目は開いていない、しかし母親は解るのだろう。あれほど激しかった泣き声がぴたりとやんだ。
「そうぇ、いい子ね、もう少ししたらおっぱい上げるわよ」
子供は言葉を理解しているかのように頷いた。
「何で君の言う事は解るんだ？」
彼女は自分のお腹から子供に繋がっている白い蔓を手に載せた。
「この子は今でも私なの、貴方だって自分の身体の事は自分がよく知っているでしょ？」
少し乾き始めたその白い紐を彼女は噛みきった。
「でもこれでお仕舞い。すぐに歩き出すは。やんちゃにならなきゃいいけれど」
「大変だっな」
彼女へのねぎらいの言葉ではなく、正直な気持ちが荒い呼吸に押し出されたのだ。
「そうよ」
勝ち誇ったように彼女は言った。
「なのに雄達は雌を奪い合い、子連れとあらば容赦なく殺す。貴方だって私があれほど大切に育てた子供達を」
「それは」
「そうね」
言い訳をしょうとすると、彼女はそれを遮り言葉をかぶせた。

「そう、それは当然の事かもしれない。でも雄にとって当然の事でも雌にそうじゃない、狂ってるわ、だってそうでしょ、こんなに苦しんで産んだ子が父親が変わるたびに殺されてしまうのよ」
バハラは高ぶった感情の熱を吐き出すように、静かに深呼吸をした。
「だからお願い強くなって。私を思うなら強い雄でいて。もう子供が死ぬのは見たくない」
俺は子供ごとバハラを抱きしめた。そしてこの時、自分がした事を本当に後悔した。悲痛な叫び声をあげ谷底へ落ちていた子供達はバハラ自身だったのだ。俺はまるで小石を投げるかのように子供を葬った。あの時バラは言った”俺はバハラも子供も守らなくてはならない”。くだらないと俺は笑った。しかし今は彼の気持ちが理解できる。俺はバハラに寄り添った。バハラは安心したのだろう、子供を胸に抱き寝てしまった。その寝顔を見て思った。ただ自分を大きく見せる為に強くなりたいと旅に出たが、それは愚かな思い上がりだった。強さとは自分の為にあるものでなく、大切な雌や子供を守るために必要なのだ。俺は自分が恥ずかしく、情けなかった。

生まれた子を俺はプレイと名付けた。前から自分に息子が出来たならこの名前を付けようと決めていた。母親似でとても美しい顔立ちをしていた。本音を言えば少しは自分にも似てほしかった。しかし可愛い事に代わりなく溺愛した。そんな俺を呆れ顔で見ながら彼女は聞いた。
「ねえ、何でプレイにしたの？」
たっぷりのミルクを飲みバハラの身を預け眠るプレイを眺めながら、昔、人間の住む村の近くを通った時の事を彼女に話して聞かせた。
「まだ薄暗い早朝だった。草むらで休んでいとそこへ母と子供がやってきた。二人は俺に気づかなかった。背負っていた茶色い物を地面に置くと穴を掘り始めた。暫くすると水の匂いがしてきた。二人は僅かに滲んでくる水を茶色い物にくんだ。そして水がその茶色い物にいっぱいになった頃、大地の向こうから太陽が顔を覗かせた。瞬く間に親子の身体は光に包まれた。母親は子供に何かを言った」
「それがプレイ？」
「ああ、そういわれた子供は大地に跪き、太陽に向かって手を組んだ。母親も同じように手を組み目を閉じた」
「それは、なんなの？」
「わからない、でもとてもその姿が美しく見えたんだ。なにかこう... 清らかで、暖かくて」
自分で話しているのに不思議に気持ちが落ち着いていくのを感じた。バハラも耳を倒し心地よさそうに聞き入っている。
あのときの光景を彼女と今共に見ているような気さえした。
「そうなの、でもきっと幸せになれる言葉ね、私も見てみたいは」
「必要ないさ」
「なぜ？」

「君たちも朝日に向かって頭を下げたなら同じように見えるよ。なんたって俺と違い君もプレイも綺麗だ」
「貴方にしては今の褒め言葉は上出来ね」
バハラ女は笑った。そして俺も笑った。こんな幸せな日々が続くように思えた。しかしプレイが大きくなるにつれ、予想もしなかった事態に俺は苦しめられるようになった。

「お父さん、一緒にいくよ、ね、良いでしょ母さん」
プレイが産まれ、暫くすると息子が大きな病を抱えている事に俺たちは気づいた。
「だめよ、今日は具合よくないんだから」
本来ならもう母親より大きくなっていなければならない時期なのに、プレイは貧弱な乳飲み子のように小さいままだった。体も弱く度々病気をした。一日も早く元気になるようにと上等の肉を与え続けた。しかし息子の体は成長する事を忘れたように、一向に大きくならなかった。
「お前が産んだ子なのだからどうにかならないのか」
どうにもならない苛立ちをバハラにぶつけてしまった。彼女は悲しそうに首を振った。それをみて後悔した。つらさは彼女も同じなのに、俺はすぐにそれを忘れてしまう。毎日心休まる日々など無くなっていた。そんな心配を知ってか知らずか、プレイは俺たちを困らせた。
「いつになったらいいのさ。早くお父さんのようになりたいんだ」
プレイは私を尊敬していた。夜になると側に来ては狩りの話を聞かせてとせがんだ。そのまま寝てしまう事もしばしばだった。息子の寝顔をみると無性に可愛くなって頬ずりをした。早くこの子に狩りを教えたいと何度思ったことか。
「お母さんの言う事を聞きなさい、そんな身体じゃ狩りなんて出来やしないぞ。もっと一杯食べて逞しい雄になるんだ」
「もう飽きたよ。こんな岩の陰で寝たり起きたり。お母さんと話す話しもなくなったもの」
ふて腐れるプレイ。しかしそう言いながらも彼の身体が前にも増して弱っていた。バハラもその事を一番心配していた。もしかしたらこのまま死んでしまうかもしれない。口には出すと現実になりそうで、俺も彼女もいつも見つめ合うだけだった。
「心配するな、俺の息子だ、すぐに大きくなる。そうなったらお前が嫌だと言ってもしごいてやるから」
そう言うしかなかった。バハラは下を向き表情を隠したが泣いているのがすぐに解った。
「どうした、泣くな」
子供を心配する余り思わず涙がこみ上げたのだろう。俺はバハラを抱きよせた。母親が泣き出した事にプレイも驚き、すり寄った。
「ごめんなさい、我が儘言って。我慢するから泣かないで。早く元気になって僕がお母さんの好きな物一杯捕ってきてあげるから」
プレイは母親の顔を丹念に舐め息子なりに慰めようとした。
「そうね、早くお母さんを安心させて」
バハラは涙を拭き精一杯の笑顔を息子に見せた。

「うん」
しかしその日の夜、突然プレイは苦しみだした。何も食べていないはずなのに濁った水を吐いた。嫌な匂いがした。背中をさすっても一向にそれは収まらなかった。それどころかどんどん具合は悪くなるばかり、胸を押さえもがき苦しむ姿は今までとは全く違った。
「お父さん、ねえ、どうして僕はこんなになったの？お母さん、もう死ぬの？」
プレイは力無く呟いた。聞きたくない言葉が息子の口から問いかけられた。どう答えればいいのかわからない。そしているうちに呼吸が浅くなっていった。俺は頬ずりをしながら空を仰いだ。息子が生まれた日と同じ美しい満月の夜だった。月は新しい命を授けもするが、その反対に弱き命も連れ去っていく。あまりに明るすぎる月に腹が立った。なぜなら息子から吸い取った命で輝いているように見えたからだ。バハラはプレイを抱きしめ泣き崩れた。
「貴方... お願いこの子を助けて...」
見るに耐えないと母親の漏らす呻きだと思った。やり場のない悲しみが雄であり父である俺にぶつけられている。俺はそう解釈しバハラを慰めた。けれど彼女は俺の手を払いのけ顔を背けた。
「違うのよ」
何が違うというのか？俺の命を差し出せというのだろうか？それが出来るくらいならとうにしていた。
「助けられるものなら助けたいさ、だがどうしてやる事も出来ないだろ」
プレイの目は窪み、その瞳に夜空の月が写っていた。もう意識もなくなりかけていた。
「貴方に奪われたものが大きすぎて、私は生きている事の方が辛かった。でもこの子がいたから踏みとどまれたの」
「今更いうなよ、俺だって苦しんだ」
「違うの、最後まで聞いて」
バハラは俺の言葉を押し固め、更に胸の内に隠していた本音を俺の身体にねじ込もうとした。
「この子を産んだ事でやっと悲しみから抜け出す事が出来たの。もしこの子迄いなくなったなら私は自分がどうなってしまうか分からない。死にたいとかそんな楽な結末でなく、多分私は気が狂って何も考えられなくなるでしょう」
痛かった。古傷がまたぱっくりと口を開け、鮮やかな血を滴らせているようだった。耳をふさぎ悲鳴をあげたいと思った。おそらくバハラを見る俺の顔は歪んでいたはずだ。
「憎みたいなら憎め、それで気が済むなら憎めよ...」
もう言葉は鳴き声に近かったはずだ。それを聞いたバハラは目を閉じた。プレイは意味不明の言葉を並べている。俺たち家族をざわめきという沈黙が飲み込んだ。しばらくするとバハラが顔をあげ、消え入るような声で言った。
「この子を助ける方法が一つだけあるの。でも貴方はそれを拒むはずよ、いいえその前にプレイを殺してしまう」
助けたいと思い必死に世話をしてきた我が子、それを殺す事などあり得ない。あまりの悲しみにバハラは狂ってしまったのだろうか？彼女の顔をのぞき込んだ。
「洞窟よ、あそこの土でプレイは助かるの」

洞窟と聞いてぴんときた。彼女が言っているのはバラが子供達を引き連れていたあの場所の事だ。しかし同時にそれは恐ろしい事実を意味した。プレイが産まれる前、俺は彼女に聞いた事があった。
「バラは洞窟で子供に何をさせていたんだ？」
彼女は口ごもりなかなか言おうとしなかったが、仕舞いには諦めて話してくれた。バラは洞窟の泥を子供達に与えていたのだ。何故そんな事をしなければならないのか訪ねた？すると意外な事実が分かった。ババラから産まれた子供は同じ病気を持っていた。彼女は自分の身体を恨んだ。しかし原因は彼女にではなくバラにあった。彼はババラと出会う前に暮らしていた雌との間に、何匹か子供を産ませていた。しかしどの子も同じ病で死んでいったらしい。それを聞いて彼女はバラが哀れになったという。弱っていく我が子を賢明に看病するバラを見て何とかしてやりたいと彼女は思った。その時彼女はある事を思い出した。自分がまだ幼いときバラの母から聞いた話だった。それは山の麓にある洞窟に不思議な泥の言い伝えだった。それを嘗めると病に冒された身体に生気がみなぎってくるというのだ。しかし真に受けてはいけないと彼女は母に聞かされたという。なぜなら悪戯のつもりでその泥を嘗めた者が泡を吹いて死んだというのだ。それからは誰もその洞窟に近寄らなくなったらしい。ババラは母の言いつけを破りその洞窟に子供を連れて行った。もちろんバラには内緒にしての行動だった。もし子供が泥を食べて死ぬようなら自分も死のうと彼女は決めていた。そして泥をすくい弱った子供の口に入れた。するとたちまち子供は元気になり可愛らしい笑顔を彼女に見せた。連れ帰った子供の変わり様を見てバラは嬉しさのあまり、厳つい顔に似合わない大粒の涙を流したという。それから彼は定期的に子供達を洞窟に連れて行くようになったらしい。つまりプレイの病気が洞窟の土で直ると言う事はそれは...
「お前は何を言ってるのか分かっているのか」
「ええ、だから言えなかったの。もし話したらプレイを殺したでしょ」
「知っていて騙したのか俺を？」
「違うわ、私もわからなかったのよ、だって貴方も知ってるでしょ。死んだバラの息子達は嫌になるほど彼に似ていた。けれどプレイは違った。多分この子はお腹の中で危険を感じたの、生き延びる為に私にそっくりに顔を変えたのよ」
プレイを抱いていた俺の腕は固まっていった。溺愛してきたこの子が自分の子ではないなんて信じられなかった。
「証拠は？」
「病気の様子が同じなのよ、いくら顔を変えてもバラの血まで隠せなかったの」
まじまじとプレイの顔を見た。やせ細った身体は骨が透けて見えそうなほどだった。
「いつ気づいた？」
「この子が貴方の後を追いかけ始めた頃よ、少し身体を動かすとすぐにぐったりとしたでしょ。なんか嫌な予感がしたの。けれどそれは予感に終わらなかった。次第に以前見た子供達の苦しむ顔にそっくりなっていくの」
今まで胸に押し込めていた秘密を淡々と語り出した。
「この子を殺す？」
ババラはうつむき言葉を地面に落とした。

「いいのよ、そうしたければそうしても。血のつながっていない子供を育てる雄はいないものね。でもこの子がいなくなったらもう私は子供は産まないつもり。いえ雌である事をもやめたい」
息子を助けたいからそう言っているのか、もう耐えられないとさらけ出そうとしているのかは解らない。しかしバハラの言葉が脅しでない事だけは確かだった。
「もしそれでも私に自分の血を植え付けようとするなら。私は喜んで死ぬ、別に脅しているわけじゃないの。思ったままをいっているだけ、いいの、恨みはしないから」
「お前はさっき助けてくれと言ったばかりだろう、それも嘘なのか？」
「わからないは、もう」
悲しみと怒りの区別も出来ぬほど動揺していた。なのに”わからない”という曖昧な答えに無性に腹が立った。
「何だそれは、母親だろう」
「ええそうよ、だから分からないのよ、だって真実を知った貴方がプレイを殺す事も止めれない。万が一貴方の愛情が残っていてプレイを助けられたとしても.... 前のようにこの子を抱いてあげられる？出来ないでしょう？この子にとってそれは酷く悲しく辛い事。そうでしょ？プレイは私より貴方が大好きなんですもの」
「お父さん、狩りにつれていって。。。お母さん良いよね」
プレイはうわごとを言った。そして苦しいはずなのにニコリと微笑んだ。夢の中で母親の許しをもらったのだろう。ずっと我慢していた狩りに俺と出かけられる、そう思いはしゃいでいるのだ。
「この子は何も悪くないの、なのに何故こんな苦しまなくちゃならないの？おかしいわ。雄は好きなように命を作り、好きなように命を潰す。貴方達にとって命って何のなのよ」
力無く彼女は言った。ふるえる身体はどんどん小さくなっていく。プレイの顔をじっと見つめた。バラの面影はどこにもない。産まれてからずっと慈しんできた我が子。血とは何なのだろう？彼女に問われても答えはなかった。
「なあ、俺はこの子の父親か？」
「貴方がどう思おうと、プレイにとって父親は貴方だけ。ご覧なさいよこの子の顔。もうすぐ死ぬというのにこんなに嬉しそうな顔をして、今頃どこを貴方と歩いているのか...」
月の光が夜露の落ちる音さえ吸い取ろうとしていた。なのにプレイに囁く死の招き声だけはハッキリと聞こえた。バハラの言うとおりもう死はすぐそこまで来ていた。
「一生嘘を突き続けられるか？」
俺はバハラの目を見た。
「どんな嘘？」
「プレイは本当の俺の子だと」
目を丸くするバハラ。
「貴方はそれでいいの？」
バハラの声は疑いという沼から期待という泡を立てているようだった。俺は自分の気持ちをどう言葉にしたらいいのか迷った。なぜなら思いついたどの言葉も口に出した途端嘘に聞こえてしまいそうだからだ。
「俺だって怖いんだ」

やっと出た言葉がそれだった。しかし本心だった。もしこの子を死なせたなら、必ず後悔に苛まれる。俺はそれに耐えれる自信がなかった。
「プレイがいなくなっても、俺の側にいてくれるか？」
「そうなったら、もう私なんていらないでしょ？」
「もう一度、旅にでてお前のような雌に会えるとは思えない。本当のことを言う。今の俺に必要なのは」
草むらを一陣の風が通り抜けた。遠くで何頭かのコヨーテが鳴き合わせていた。
「俺に必要なのはプレイより、バハラ、君なんだ。こんな情けな雄はいやか？」
彼女は顔を横に振った。
「ありがとう、貴方、なら私が貴方の側にいられるようにして。お願いプレイを助けて」
「どこへも行くなよ」
「離れない」
プレイを背中に乗せバハラを振り返った。
「時間がない、行くぞ。もし夜明けまでに戻ってこなければ...」
そう言いかけたときに彼女は首を振った。
「大丈夫、貴方を信じてる」
バハラを残し月から逃げるように走り出した。そしてうっすらと見える山陰に向かって夜を突き抜けた。闇が魔物が飛び出し俺と息子を飲み込もうする。
「どけ、息子を死なせはしない」
雄叫びは大地に闇の静寂を破り、突き抜けた。

あの日以来、プレイは嘘のように元気になった。狩りにもついてくるようになり身体は日増しに逞しく変わっていった。もうバハラが彼を引き留める事もなく、野原を駆け回る若きライオンに彼女は目を細めるだけだった。今までプレイに与えた苦痛を詫びるかのように大地は彼を暖かく包み込んだ。歓喜の声、満面の微笑み、空を見上げる澄んだ目、生きている事が嬉しくて仕方ないようだった。俺はバラの血に負けたくないという意地もあり、自分の持つ知識と技の全てを息子に叩き込んだ。乾ききった大地に雨が染み込むようにプレイはあっという間に会得した。バハラも俺の教育に口出しはしなかった。
「プレイ、お父さんのように勇敢なライオンになりなさい」
その言葉を言われると胸が痛んだ。お前の真の父こそが勇敢なライオンだと喉まで出かけた。しかし言えるはずもなかった。俺を尊敬するキラキラした息子の目がそれを許さなかった。強い父のまま居続けるしかなかった。
「貴方、ありがとう。でもごめんなさい...」
プレイの事で詫びているのではなかった。彼女はあれから発情しなくなった。当然のごとく身ごもる事も無かった。
「お前が謝る理由はないさ、俺の宿命なんだろう」
「私と暮らして何一ついいこと無いわね、後悔してる？」
「どう言ってほしい？」
「わからない」

「またそれか」
「怖いのよ、そのうち私は捨てられるんじゃないかって」
俺はため息をついた。
「そんな卑怯な奴に見えるか？」
「そういう意味じゃないの。ただ時々、寂しそうな目で遠くを見ているから」
「蟠りがないと言えば嘘かもな。けれどこんな生活が身体に染みついて俺は変わった。独りで暮らしていたときは一日誰と話さなくても苦じゃなかった」
「うん」
「だが今はお前の笑い声を聞かないといられない。安心しろ俺はどこへも行かないよ」
俺は爪の先で枯れ草を掘り起こした。乾いた土がサラサラと落ちていった。
「貴方は強く優しくもなった。だからこんな愚痴をいって甘えていられるの」
バハラは細い尾を俺の尾に絡めた。すり寄る彼女を見て思った。バラといたときの彼女の方が美しく、近寄りがたい気品が漂っていたような気がした。だからといって彼女が無節操な雌になったというわけでもない。ただこんなに弱い雌では無かったはずだ。やはり俺とバラの違いが彼女こんな風にさせているのだろう。
「もっと強くなるといいな」
「プレイのこと？」
「ああ、強くなってお前のような美しい雌をめとり、幸せに暮らしてほしい」
「もうすぐよ、あの子も独り立ちするは。そうなったら貴方の子供だって産めると思うの。そうしたら私たちもやり直せるは」
「やり直すなんて思わなくていいよ。君とのこの暮らしが続きさえすれば他に望む事はない」
俺はそう言うとバハラの顔を舐めた。彼女はくすぐったそうに頷いた。
「父さん、早くいこうよ、もう太陽があんなに高く昇ったよ、お母さんいいだろ？」
「あら珍しいわね、お母さんに聞くなんて。どうぞ行ってらっしゃい。待ってるから」
「そうじゃないよ、父さんを放してよ。お母さんがそうやってると、いつまでたっても父さん狩りにいきそうも無いじゃない」
プレイはふてくされ顔で母親に訴えた。それを見て彼女は笑った。
「元気になってもその顔だけは変わらないのね。あはは、でもしょうがないでしょ。私の旦那さんなんだもの」
バハラはこれ見よがしに私にすり寄った。悔しいのかプレイはバハラを引き離そうと彼女の尾をくわえてひっぱった。
じゃれ合う親子に俺は言った。
「プレイ、今日はお前独りで言っておいで」
ぴたりと母子の動きが止まった。そしてこちらを振り向き同時に同じ事を言った。
「無理よ」
「無理だよ」
俺はゆっくりと首を振った。
「無理なものか、必要な事はすべて教えた。あとはお前の次第だ」
「貴方、私が独り立ちっていったからなの？でもまだ早いわよ」

不安げな目でバハラは俺を見た。
「俺なんてもっと早くに父に言われた。『腹の足しになる獲物を仕留めて来い、それまでは帰って来なくていい』とな。
それも父親と出かけた狩りの最中だった。独り置き去りにされたな、さすがに心細くて泣いたよ」
「で、どうだったの？上手くいった？獲物は？」
目を丸くし答えをせっつく顔を押しのけ言った。
「それを聞いてどうする？俺とお前は違うだろ？」
「もし失敗したらどうすればいいのか解らなくて」
「失敗したら？聞くまでもない、狩りの出来ぬライオンに待っているのは死だ」
「僕に出来るかな」
俺は尾を地面に打ち付けた。その音にてプレイは身体を堅くした。
「自分を信じろ」
息子はしかたなく諦めたようだった。
「わかったよ」
プレイは不安げな面もちで住処から出ていった。背中にはいつもの元気が感じられない。
バハラは何か言いたげだが、これは父親にしか解らぬ事。バラも同じ事をしたはずだ。雌が血を流して子供を産むなら、雄はこうやって子供を育てる。責任は母親の痛みと同じ苦しみなのだと俺は自分の父親から教わっていた。

バハラは地平線のその先を見つめていた。プレイが狩りに出てから月は半分にやせていた。その間、不思議な事が何度か起こった。山が怒り大地が大きく揺れた。初めての経験だった。鹿や水牛、シマウマにキリン、あの巨体の象までもがしゃがみ込みブルブルと震えた。無論バハラも例外ではなかった。何か悪いことが起きる前触れだとヌーの群れはこの地を離れた。彼女はぽつりと言った。
「大丈夫かしら」
俺はピリピリしているバハラを避け、少し離れた草むらで彼女のを見ていた。
「この二三日揺れも来ないからもう大丈夫だろう」
「そんなこと心配しているんじゃないは」
「またプレイのことか」
バハラはプレイの病気が心配でならなかったのだ。当然、俺もそれは気にしていた。しかし、息子は洞窟への道は心得ている。親に言われなくとも、自分で自分の身体を管理するのは当然の事、そんな愚かな子ではないと信じていた。だからバハラほど慌てもしなかった。しかし、そんな俺を見て彼女は愚痴を漏らした。
「よくそんな平気な顔でいられるはね、信じられない」
もしかしたら、その後に『やっぱり自分の子供じゃないからかしら』と付け加えたいのかもしれない。彼女の苛立ちが汚す風を、いやがおうなしに飲まされる俺はそんな穿った事も考えたくなった。しかし最近、俺も耐えることも覚えた。感情のまま言い換えさなくな

っていた。自分も少し成長したかなとおもわず苦笑した。
「なによニヤニヤして、大体貴方って」
彼女が声を張り上げようとした時だった。背中の草むらが揺れた
「帰ったよ」
振り返ると死んだはずのバラが立っていた。彼女も俺も息を飲み、自分の目を疑った。
「どうしたの、僕だよ、プレイだよ」
その声を聞き俺達は我に返った。確かにどことなくプレイの面影は残っていた。しかしそれは残っている程度で、目はつり上がり、口は大きく裂け、風になびく鬣は見事な顔の縁を覆いた。それだけではない。ここを出て行くときは、あれ程、自信なさそうに見えた背中が、今は怏々しい象牙の如く反り返り、厚みを増した胸は凄みのある声を響かせていた。見れば見るほどバラに極似していた。
「本当に坊やなの？」
プレイは笑った。
「当たり前だろ」
口を開けたまま何も言えずにいる俺にプレイはゆっくりとした口調で尋ねた。
「そんなに見つめて、僕の顔に何か付いている？お父さん」
この時、お父さんという言葉に違和感を覚えた。
「見違えるように逞しくなって驚いたのさ、しかし元気そうだな」
「さあ、何をしているの、こっちにいらっしゃい。でもよかった。最近、地面が揺れた事があったでしょ。もしかしたらなんて思ってしまって」
「そういえば帰る途中、地面が大きく裂けた場所がいくつかあったよ」
「よかった貴方に何も見なくて。無事に帰って来てくれて本当によかった」
待ちに待った息子が戻ってきた事でバハラの喜びようは尋常ではなかった。もしかしたらバラが生き返ったと錯覚していたのかもしれない。とにかくさっきまで不機嫌だった彼女はどこに消えたのかと思う程だった。
「さあ、座って」
プレイは俺の前を通り過ぎ、岩下の日陰に腰を下ろした。それを見てバハラはあわてた。
「何を知るの、そこはお父さんの場所でしょ」
確かに俺の場所と決まっていた。
「そうだったっけ」
忘れるはずなどない。プレイが生まれる前から俺はそこに座り、息子もずっとそれを見てきたのだ。明らかに故意だとわかった。プレイは前足を振りながら怠惰そうに立ち上がろうとした。気まずい風が漂った。喜び浮かれていたバハラが眉間に皺を寄せた。俺も初めての狩りで上手く通り狩りが出来た時はこんなようなものだった。本来なら叱りつけるべきなのだろうが、それではバハラが可哀想だと思い許してやった。
「今日は特別だ、座っていていいぞ」
「だめよ、プレイどきなさい」
彼女は困った顔をした。見かねた俺は自分から歩み寄りった。そして腰を下ろし話かけた。
「で狩りはどうだった」
「うまくいったかって事？父さんはどうおもうの」

「その口ぶりじゃ、水牛の２・３頭はしとめきたようだな」
こちらに視線を向けるでもなく面倒そうな口調で答えた。
「簡単だったよ、あんなに心配する必要もなかったね」
「じゃあ俺がいなくても」
「ああ。独りの方がずっと狩りに集中出来たよ」
散歩に出てサソリでも踏みつぶしたかのように事も無げに言った。
「偉いは、それでこそ父さんの息子よ」
バハラは愛しそうにプレイの顔をなめた。ようやく場がなごんだ気がした俺は冗談交じりに聞いてみた。
「それで、仕留めた獲物はないのか？自慢話だけじゃ腹はふくれないぞ」
ニヤリと笑うプレイの目が光った。赤い舌がゆっくりと喉の奥から垂れ下がった。
「母さんが一番好きな肉を用意しておいたよ」
「嬉しい、でもなにかしら、早く見せて、どこにあるの？」
俺も彼女もあたりを見回した。
「母さんごめん、重くてここまではもって上がってこれなかった。でも大丈夫、ほらあそこに」
プレイは立ち上がり草むらをかき分け高台の断崖に立った。そこは以前、俺がバラに助けられ目覚めた時、足をすくませた場所だ。しかし、高い所が苦手だった俺もようやくこの場所に慣れた。バハラも俺もプレイの視線の先に目をやった。
「うそ」
バハラの口がわなわなと震えた。俺たちが眼下に見た物は頭だけになった象だったからだ。その有様ときたら鼻はもぎ取られ、目はくり貫かれ顔は恐怖に歪んでいた。俺の身体は震え一気に血の気が引いた。プレイは姿形だけではなく、息子の身体の中でバラの血が目覚めてしまったのだ。
「お前が仕留めたのか？」
「お父さんに見てもらいたくてね」
どうだあんたに出来るか？そんな挑戦的な目をしていた。若者特有の虚栄心がそんな態度をとらせているのだろうか？初めて独りで狩りをし、その成果がはじめから俺を追い抜いてしまったのだ。わからなくもなかった。それにどうあがいても右目のない俺に像を倒す自信はなかった。血に受け継がれた強大な力、それは否定することを許さない説得力を持っていた。俺は思わずため息をついた。
「内臓は食べてきたけれど、一番おいしい頭の中の肉はそのままだから、お母さん食べて。象好きでしょ？」
「・・・なんて食べたことないはよ」
バハラは俺に気兼ねして首を振った。
「え？そうなの？おかしいな・・・、まあいいよ旨いよ、象、特に頭の中の肉はふわふわしてとろけそうなんだ」
「じゃあこれが初めての象じゃないのね？」
プレイの目が輝いた。
「いたづらのつもりで子象の尻尾に噛みついたんだ、そしたら暴れてやがって」

言葉遣いに棘を感じた。俺もこんな風に話していたのだろうか。
「それで？」
「その声を聞いた母象が突進してきた。それも狂ったように鼻を振り回してさ。さすがに慌てたね、でもなんて事はなかった。目をつぶしちまえば後は子鹿と変わりない。あっという間に肉の塊になって大地に転がってたよ」
「貴方は怪我をしなかったの？」
バハラはプレイの身体を舐めるように見回した。プレイは少し鬱陶しげに舌をならした。
「大丈夫だって、どこも怪我なんてしてないよ」
「そう？でもあんまり無理はしないで、普通の身体じゃないんだから」
「病気の発作のこと？」
プレイは自分の手のひらを舐めながら聞き返した。
「お前のことを心配して、お母さん痩せたんだぞ」
「お父さんはどうなの？心配した？」
何かがプレイの心に住み着いた、そんな気がした。
「当たり前だろ、だが賢いお前のことだ、そこら辺はちゃんと考えていると信じていた」
「ふぅ〜ん、そう」
何とも気のない返事だ。
「それでどうなの、体の具合は、そろそろ行かないといけないでしょ」
「洞窟？それなら行って来たよ」
「独りで行ったの？あんな険しい谷の洞窟へ」
「よしてくれよ、子供じゃないんだから」
「なにいってるの、貴方はまだ」
言い終わらないうちにプレイは足を投げ出した。
「此処によってからじゃ遠回りになるだろ、もう独りで十分さ」
「そう...」
”来るな”という強い意志を感じた。親元を巣立つ直前はあれこれ指図されたくないものだ。俺は意地を張るプレイを何とか暖かく見守ろうとした。

しかし、翌日からプレイの態度は更にひどくなっていった。まるで自分がこの住処の実質的あるじのように振る舞った。そればかりではない、自分ですべき狩りも俺に任せきりにし一行に動こうとしないのだ。
「さあ、狩りに行くぞ、ついてこい」
「僕はいいよ、いつでも捕まえられる。それに父さんだって僕にいいとこ見せつけられちゃ悔しいだろ」
「お父さんに向かってなんて事言うのよ」
「言い過ぎたなら誤るさ、ただ僕はもう少しだけ父さんに甘えていたいんだよ。だって巣立つ日はもうすぐなんだから。ねえ、いいだろ、お父さん」
また最後のお父さんという言葉に嫌な物を感じた。今度はバハラもそれに気づいた。
「プレイ、貴方、帰ってきてから変わったは。私の知っている坊やとは別のライオンのよ

う。ねえ？何があったの」
悲しそうな目で訴える母親にプレイは戯けて見せた。
「何言ってるんだい、正真正銘お母さんの子供、プレイだよ。お腹のアザだってちゃんとあるだろ」
確かにプレイを取り上げた時、最初に見たのはこのアザだった。
「じゃあ何故、あれ程好きだったお父さんを怒らせることばかり言うの。あなたはもっと優しい子だったはずでしょ」
後ろ足で耳を書きながら小言はもううんざりだと。
「母さん、僕は体だけが大人になったと思うのかい？」
「それは、どういう意味よ」
「いろんな事を自分の頭で考え始めたと言うことさ、そして」
「そしてなによ」
押さえに押さえていたバハラがとうとう怒った。そのけんまくは今まで知る彼女のそれを遙かに超え、鋭いトゲをもった蔓で激しく打ちのめすようだった。驚きとともに俺は悲しくなった。
「止めろ」
「この子は貴方の恩も忘れてるのよ。貴方がよくても私は悔しくてならないの」
「恩？親が子供の面倒見るのは当たり前じゃないの？ねぇ、母さん」
それを聞いたバハラは言い返すのも嫌だと、目に涙を浮かべて我が子を睨み付けた。
「おぅ怖い、散歩でも行って来るわ、その間に少しは機嫌直しといてよね。なんなら象でも捕ってきてやろうか、お父さん」
さすがに俺も腹に据えかね威嚇の雄叫びをあびせた。轟音がプレイにぶつかったはずだった。しかし息子は涼しい顔をしてヘラヘラと笑っていた。
「はいはい、消えますよ」
そう言うと足取りも軽く草むらを飛び越え、断崖の住処をあっという間に下っていった。
残された俺達はやり場のない悲しみに立っている気力も失いヘタリこんだ。彼女がポツリと呟いた。
「貴方が可哀想」
「まだ報いは終わっていなかったのかな」
「まだそんな風に思ってるの？」
「わからないよ」
「ずるいは、そんな言い方」
「プレイが死にかけた時、君も同じようにいったよ、わからないって」
俺は作り笑いした。彼女は眉間にしわを寄せた。
「仕返し？」
「そうじゃない、でも本当にそんな気持ちなんだ。なんか寂しくてな・・・」
「私がいるじゃない」
バハラは自分から俺に身体をすり寄せた。いつものように良い香りがした。
「貴方が迷ってちゃ困る。言ったでしょ強い雄でいてって。あの子が巣立っていったなら、私が頼れるのは貴方しかいないのよ」

沈んだ気持ちをやわらげようと、彼女は俺の鼻を丹念に舐めた。服従の証だった。
「もう少しだけ我慢してね、もう少しだから」
「わかってる」
「ごめんなさい」
彼女が謝る理由などない。恥ずべき記憶から俺が抜け出せないだけ。結局、それが回り回って災いしているのだろう。
「でもどうしてあんな風になったのかしら、姿は別としてプレイは卑しくなったは。バラはあんな気性じゃあなかった。むしろ相手を気遣うが故に時に自分を殺してしまうような、どちらかと言えばライオンには相応しくない性格だった。なのにプレイは彼のそんな優しさやなんて微塵も感じられない。第一貴方にあれ程愛情深く育てられたというのに何もかも忘れてしまったようだは。もし以前のあの子を知らなかったなら、私には卑怯な雄にしかみえない」
『それは俺も同じさ』と口からこぼれそうだった。思い上がり、卑劣な行為、身を守る為の汚らしい策略。もし皮をはぎ取られた俺の本当の姿を彼女が見たなら、きっと目を背けるだろう。
「確かにいい気持ちはしないな。けれど無理に言うことを聞かせようとしても無駄だろ」
「私は誰かに何かを吹き込まれた様な気がしてならないの。それであんな風な態度を取っているような」
「例えば誰が？」
彼女は首を捻った。
「それが思い浮かばないのよ、でも絶対何かある、あるはずよ」
「自分の子だからそう思いたいんじゃないのかい？」
「だって絶対に変、だいたい貴方、あの子に遠慮してない？」
「どうして遠慮しなくちゃならいんだ」
「ならもっと彼を叱ってよ、その義務があるのよ。気持ちは解らないでもないけれど逃げないで」
俺はそれ以上何も言わなかった。バハラは何ともやりきれないという顔をした。
「一緒にいられるのももう少しなのに、こんな気持ちで別れなきゃならないなんて、綺麗な目をしたプレイを見送りたいは」
彼女はため息を漏らした。

バハラの願いもむなしく、プレイが元に戻る様子はなかった。正直なところそろそろ出て行ってほしい、俺も鬱陶しく思い始めていた。そんなある日の夕暮れ、皮肉もいい飽きたのかプレイは何処かへ出かけようとしていた。バハラが聞いた。
「夕暮れになるといなくなってるわね、何処に行ってるの？」
俺は黙って彼らのやりとりを聞いていた。
「雌の後でも追いかけてるとか言えばいいの？」
「そうね、そうならね、でもそうじゃないんでしょ？」
「今にわかるよ」
「一体なにをしようとしているの、やっぱり変よ。今の貴方、お母さんは好きになれない」

吐き捨てるように言った母親の言葉にプレイは急に怒り出した。
「変なのは僕じゃない」
「じゃあなによ、おかしいのは父さんや母さんだっていいたいの？」
プレイは憎しみのこもった目で俺を振り返った。
「お前、何を知っている」
「あんたの胸に聞いてみなよ」
「プレイ、父さんに向かってなんて言い方するの」
プレイ地面に唾を吐いた。
「ケッ！、誰が父さんだ、俺の父さんはバラだろ」
彼女は首を振り、それを否定しようと口を開こうとした。しかしそれより先に俺はプレイに答えた。
「そうだ、俺はお前の父親じゃない」
開いた口を閉じられぬまま彼女は呆然と俺を見つめた。『何故、本当のことを言ったの？』目はそう言っていた。
「やっぱり本当だったんだ」
けしかけてきたプレイ自信が一番深刻な顔をした
「だが、だましていた訳じゃない」
「嘘を付くな、あんたのことなら何でも知ってるんぞ」
バハラの言うとおり、プレイの背後に誰かの影を感じた。息子の感情に忍び込み、俺をじっと見据えている。そんな気がした。俺は聞いた。
「誰から聞いた」
それにプレイは答えず、非難めいた言葉をバハラに吐いた。
「母さんもおかしい。なぜこんなやつと暮らせるんだ」
「黙りなさい。貴方に父さんを侮辱する権利なんてないの」
「こいつは薄汚い奴なんだ、こいつはね」
「もういい、出て行きなさい、もうここは貴方の居場所じゃない。どこえでも好きなところに行って暮らせばいい。さもなければ今この場でかみ殺すわよ」
これがあの美しいバハラと同じかと思う程、彼女の形相は凄まじかった。俺は恐ろしささえおぼえた。しかし彼女は止めなかった。前足の爪をこれ以上伸びないと言うまで伸ばし、鋭い先端を土の中に突き刺した。そして威嚇を表す低く野太い唸り声を地面に染み渡らせた。言葉になっていない言葉だけに、彼女の怒りが強烈に腹に突き刺さった。本気だとおもった。
「母さん...」
「殺されたいの？ならかかって来なさい」
プレイの力を持ってすれば彼女など無力に等しかった。しかし今この場で一番強いのは確かにバハラだった。母親しか持ち得ない威圧感が子供であるプレイを飲み込んだ。初めてみる恐ろしい母の姿にプレイは何も言えず、まるで石のように動けなくなってしまった。
「ボーとしたままつたって。目障りだわ、消えなさい。さあ消えろ」
憎しみのこもったその声はプレイを追い払うに十分だった。小さくなったプレイは私たちの目の前から姿を消した。草むらが揺れ、足音が遠ざかっていく。彼女の険しい目の縁に

うっすらと涙が滲んでいた。
「これでいいのか？」
「わからない、でも」
「でも？」
「ええ、これ以上あの子も貴方も傷つかずにすむは。そして私もそれを見なくて済む...」
そう言うとバハラは俺にすがりつき泣いた。身体に重さを感じなかった。まるでサソリが残した抜け殻のようだと思った。
「まただ、結局またおまえに押しつけて、俺は」
プレイは真実を知っている。これ以上隠せないと思った。わだかまりの原因がそれなら真実を話せばプレイは落ち着くかもしれない。 さっきはそう思った。しかし自分に問い直せばそれは直ぐに嘘だとわかった。もう耐えられなかった。楽になりたかったそれが本音だった。
「私にはこれがふさわしい別れだったのかもしれないわね」
閉じられた彼女の目から大粒の涙が俺の足に落ちた。

俺は洞窟の前に立っていた。プレイがいるかはわからない。ただここ何日も大地を探し回り見つけられなかった。最後に残されているのはこの洞窟だけだった。すぐは会えなくてもあの子は必ずやってくる。俺は何日でも待つ覚悟だった。しかしこの場に来ても息子になんと言えばいいのか迷っていた。想い悩むなら会わなければいいとも思った。しかしそう言ってはいられない事情があった。行く先々でプレイの悪い噂が蔓延していた。ライオンとして恐れられるならそれはそれでいい。しかし息子の噂とはそう言うたぐいのものではなかった。己の力を振り回し、手当たり次第にありとあらゆる獲物を殺し、口もつけずにまた次の獲物を殺すというものだ。話を聞いたハイエナはその時の光景をにがにがしく語った。
「やつは狂ってるよ」
話によると、プレイは食わずに捨てた死骸を誰にも分け与えないらしい。もしハイエナや他のライオンが近づこうものなら命乞いをする間もなく首の骨をへし折ったという。そんな噂がバハラの耳に入らぬ訳はなかった。俺も彼女もなぜそんな事をプレイがしているのか解っていた。裏切られたという苛立ちから来る俺たちへの当てつけだ。しかし彼女は俺にどうしてくれとは言わなかった。
「もうあの子は巣立ったの。私の息子じゃない、関係ないわよ。さあ我慢していた分、これからは楽しく暮らしましょ」
プレイが出て行ってから彼女は明るく振る舞うようになり、笑顔を絶やさなかった。だがそれに反し身体はやせ細っていった。隠しているつもりだろうが、草むらでする彼女の便はいつも水のように軟らかかった。『無理をするな、休んでいろ』と言っても『何でもないわ』と聞かず、少しでもプレイを忘れようと俺に身体を重ね子供を作ろうとした。ふくよかだった尻も肉がそげ落ちていった。あれほど美しかった美貌に陰がさした。夜、腹が痛いのだろう草むらに駆け込み歯を食いしばり、すすり泣く声を何度も聞いた。行き場のない怒りと悲しみ、そして恐れ。全てが底のない泥にぬかるんでいるようだった。このま

まにはしておけない。それだけは確かだった。俺が洞窟に来ることは彼女には秘密だった。狩りにいってくるといっただけで住みかを後にした。出がけに『話があるから早く帰ってきて』と彼女はいった。話とは一体何だったのだろう？けれど思い当たる事もこれといってない。俺は風の臭いに空を見上げた。しばらくすると、この時期には珍しく雨が降り出してきた。通り雨はいつになく激しかった。やむなく洞窟に逃げ込んだ。強烈なカビの臭いが内部に充満していた。しかしプレイの臭いは一切しなかった。心なしホッとした。同時に久しぶりの臭いに以前の事を思い出した。俺もプレイをつれてよく来たものだった。本音を言えば当時からの立ち入りたくない場所だった。この洞窟にはバラや彼の子供たちの恨みが住み着いている気がしていた。暗闇の奥に目を凝らした。無論、何も見えるわけはない。ただどこかで外に繋がっているのか、奥の方から冷たい風が吐き出されてくる。それが洞窟内の壁にぶつかり唸り声のように響いた。
「待っていたましたよ」
風に乗ってかすかに声がした。プレイではない。 空耳か？辺りを見回した。光の届く範囲に見えるのは名も知らぬ小さな虫だけだ。
「私ですよ」
やっと聞き取れる程小さな声、瞬時に俺は身をかがめ爪を伸ばした。
「そんな所にいないで、さあこちらにどうぞ」
「誰だ」
「来ればわかります。それとも怖いのですか？」
その声には嘲りの笑いがまぎれてた。
「どこだ」
カビの臭いしかしなかった風に肉が腐ったような悪臭が混ざり始めた。
「ここですよ、わかるでしょ。ほら」
勝手に足が前に出た。自分の身体じゃないような不思議な感覚かした。
「そう、それでいいですよ」
何も見えない暗がりをぶつかりながら進んだ。次第に天井は低くなり、洞窟はいくつもの横穴に分かれていった。更に足下の起伏の激しくなり、仕舞いには上もしたも不確かになっていった。
「どこまでいけばいいんだ」
少し怯えた俺の声が岩に跳ね返った。何頭もの俺がいるように聞こえた。
「もうすぐですよ」
今度ははっきりと聞こえた。間違いなく声の主に近づいている。自然と歩みはその早さを増した。その時俺は気づいた。悪臭の隙間に水の臭いがする事を。それは間違っていなかった。すぐに勢いよく流れる水の音が聞こえてきた。川のようだった。しかし何故こんな場所に？
「よく来てくれましたね」
すぐそこに声は聞こえた。暗闇で何も見えないのに俺の左目は自然と声のする方を向いた。
「片目の暮らしにも慣れましたか？」
真っ暗な洞窟、やつには俺が見えるのだろうか。そんなはずはない。
「俺が片目なのを知っているのか」

「貴方の顔は嫌と言うほど知ってます。確かバラと戦ったときに右目を失った。そうでしたよね？」
「誰なんだお前は」
「この声を忘れましたか？一時は貴方の下部でもあったのに。ああ・・・なんと情けない」
ハッとした。どこか聞き覚えのある声だと思っていたが、下部という言葉を聞いて要約気づいた。
「嘘だ、そんなはずはない、確かにあの時」
「殺したはず？とでも言いたいのですか、腰抜けムブユさん」
バサバサと羽音がした。しかしそれはとても弱々しぃ。
「タカタカか」
「そうですよ、貴方に毒入りの鹿を喰わさせられ死んだ哀れな禿鷹のタカタカですよ」
何がどうなっているのか整理がつかなかった。
「さぞかし驚いたでしょうね。それも無理はない。私も自分は死んだと思いましたからね。けれど、バラの怨念が私にそうさせなかった」
呆気にとられている俺をそのままに、奴は話し始めた。あのとき毒入りの子鹿を食べ死んだ（はず）タカタカを俺は雨期で出来た川に流した。本来なら死んでいて当然だった。しかしまだその時タカタカは死んでいなかった。意識朦朧のまま流され、川は大地の裂け目から地中深く落ちていったらしい。
「太陽を見たのはそれが最後でしたよ、私は地下水脈を枯れ葉のように押し流された。羽の油も取れ、水中に沈みかけようとしたとき岩に引っかかりました。昔から水が嫌いで溺れ死にだけはしたくないと岩の上にはい上がりました。しかし毒にやられた身体ではそこまでが限界。息も絶え絶えの私は貴方を憎みながら最期を迎えようとしていた。その時です。天井から一滴の水が私の口に落ちた。例えようもなく苦かった。けれど吐き出す前にそれはのどの奥に吸い込まれていった。死ぬ間際までこんなまずいものを口にしなければならないのかとう呻いた。暫くするとあれ程激痛に支配されていた身体から痛みが引いていくじゃありませんか。本当に死ぬ時は痛みも何も感じなくなるものなのかと思いましたよ。そして更に一滴。また一滴。次第に朦朧としていた意識が鮮明になり始め、そのせいで強烈に苦を感じるようになりました。なんとかそこから逃れようともがきました。するとさっきまで全く力の入らなかった手足が動かせるようになっていました。それだけじゃない。体が軽くなっていくような清々しい気分になっていくんですよ。私には何がなんだか分かりませんでした」
俺にはすぐにその訳が分かった。この洞窟の土はプレイの病気を治したように毒をも消す力があるのだろう。
「しかし後になって気づきました。岩から染み出してくる水には不思議な力がある事をね。じゃなければ私は間違いなく死んでいましたよ」
「運がいい奴だ」
「そう思いますか？」
暗闇の中のその声は音色を変えた。
「本当の苦しみはそこから始まった。羽を折られ、川に流される時に右足も砕け満足に歩けなくなっていた。俺は昼も夜もないこの洞窟で、川の小魚や得体の知れない虫をついば

み生きるしかなかった。唯一の楽しみはミブユ、あんたを憎むことだけ」
「おかしいだろ。俺もここには何度も来た。なのになぜ今になって正体を現した。いくらでも出てこれたはずだろ」
「あんたの通ってきた道はつい最近出来たもの、あっただろ？地上でも激しい揺れが。ここが外と繋がったのはその時さ」
タカタカはバタバタと羽を鳴らし、音でその時の揺れの凄まじさを再現した。確かに何日にもわたって大地が揺れ、地面が裂けた。
「外から流れ込んでくる新鮮な風、もしかしたらここから出れるかもしれない。胸は高鳴った」
何も言った訳でもないのに奴は首を大きく降った。
「しかし、外に続く道はとても狭く険しすぎ、左足だけでここを抜け出すなど不可能だった。悔しさと恨めしさで泣いたよ。たが奇跡は再び起きた。救い主が現れたのさ」
奴の不適な笑いにハッとし、俺は微かに声をあげた。
「やっと、わかったようだな？プレイが、正確に言えばあんたに殺されたバラの息子が岩の隙間を通ってやってきた」
「どうしてそれを？」
「彼と話をするうちに、父と慕うライオンがあんただという事を知った。さすがに私も驚いたよ。しかし話声を聞いているとどうにも聞き覚えのある声で不思議に感じた。丁度、狩りの帰りだというから、何を捕まえてきたと訪ねると、どうだい。象を仕留めたて来た言うじゃないか。その時分かったよ。父親はあんたじゃなくバラだとな。そう思って聞いて見りゃ確かにバラそっくりの声だよな」
もっとも出会ってほしくない両者だった。
「バラの恨みが引き合わせたのさ。その想いに従い私は自分のすべき事をした」
姿が見えないだけに闇全てが奴のように思えた。
「本当の事を話したのか？」
「私の憎しみをたっぷり塗りたくった真実を聞かせてあげたよ」
タカタカはケラケラと笑った。
「その時の驚いた声、聞かせてやりたかったねえ。あんたも知っての通り、プレイは気の毒なほど真面目で純粋な子だ、そんな良い子が信じて疑わなかったあんたが、こんなにも卑怯な奴だと知ったならどうなるか言わなくても分かるだろ。いや楽しかったね～」
喜びを押さえきれないと振るわせる羽尾。肉の腐った臭いが再び押し寄せてきた。
「プレイとは関係ない話だろう」
俺は精一杯の言い訳をした。それを聞いたタカタカの口調は一変した。
「おおありさ。おまえが苦しむ事なら何だってするさ」
「例えどうあろうとバラは俺に負けたんだ、生き残るためだ、何が悪い」
「もし本当にそう思っているならあんたは糞だ」
「何だと」
「開き直るきか？そうだろな、おまえはそう言う奴だ。だからバハラにもあんな酷い事が言えたのさ。その上、私をこんな目にあわせやがって」
「俺たちのお陰で生きていた禿鷹が偉そうなことをいうな。イヤなら故郷へ帰ればよかっ

ただろう。そばにいてくれと頼んだ覚えはない。結局、おまえは楽をしたいかっただけ、ちがうのか？」
狭い洞窟にタカタカと俺の怒号が響き渡った。鬱積していた想いが小石のように側壁にぶつかり粉々に砕けた。
「あんたは褒美にライオンの肉を与えてくれると約束をした。しかしあの時お前はなんといったか覚えているか？『食えるものなら谷の底に降りて食ってこい』だぞ。それが長い旅を供に苦労した者にいう言葉か？只の使い捨てなんだと悟ったよ。だから今度はお前をこき使ってやるときめたのさ。つまりはおまえがそうさせたんだ」
小川を挟んで怒りに震える声がこの時とばかりに訴えてくる。それがじわじわと俺を締め上げ、あの時の恐怖と後悔が蘇る。胸が苦しい。息が出来ない。このままいたら発狂しそうだ。
「もう沢山だ、今度こそ死んでもらう」
とは言ってみたものの足が動かない。川を飛び越えようにも幅や深さがわからないのだ。
「さあ、こいよ、来てみろよ」
「まってろ」
一か八か飛び越えようとと身構えたその時、背後に気配を感じた。振り向こうとした俺の喉に鋭い爪が突き刺さった。
「お久しぶり」
声の主は直ぐにわかった。プレイだった。俺は唾をひと飲みした。
「ああ、久しぶりだな」
「ほほう、麗しき親子の再会。いやー感動ものだな。まてよ、そういえば親子じゃなかったな。それどころかプレイにとっては父親の敵、ムブユにとっては目障りなバラの子だものなー。これは最悪の巡り合わせか？」
白々しいタカタカの言葉に俺は何も言い返せず、苦い唾が溜まっていくのをそのままにした。
「タカタカから聞いた話は本当なのか？」
喉の爪は更に肉に食い込んだ。
「それを聞いてどうする、昔のことだ」
「ふざけるな。卑劣な手段で父や兄姉を殺し、罪を母に押しつけ、無理矢理自分のものにしやがって」
「ああ、そうだな」
「認めるのか・・・」
否定してほしかったのだろう、力ない落胆の声が更に闇を重くした。
「詫びほしいか」
「いや」
その声は泣いていた。
「お前のような奴を”お父さんと”呼んでいた自分が許せない」
「そうか」
「父さんの復習だ、八つ裂きにしてやる」
既に『父さん』というこの言葉は俺に対して使われる言葉ではなくなっていた。しっぽを

くわえながらどこへでもついてきた子供のプレイ。目をくりくりさせじゃれる姿が浮かんだ。幸せだったあの頃。しかしそれも息子にとっては恥なのだろう。タカタカの言うとおり確かに互いに牙を向き合う関係になってしまったのかもしれない。
「こんな日が来るんじゃないかと思っていたよ」
本心だった。こうならなければいいと思う反面、待ち望んでいたような気もする。なぜならムブユというライオンか許せないのはプレイ以上に俺自身だからだ。卑しく汚れてしまった自分でいることはもう限界だった。
嬉しくてたまらないとタカタカが笑いながら片足で飛び跳ねた。
「プレイはあのバラの息子、それも血気盛んな若者だ。到底かなわぬ事ぐらいお前がよく知っているだろう。どうだ、あの時のように命乞いをしたら？もしかしたら情けをかけてもらえるかも知れないぞ」
「その必要はない。いいだろう。バラの復讐というのなら正々堂々と戦うまでの事。さあ、表へ出ろ」
覚悟を決め、来た道を戻ろうとした。
「油断するな、逃げるかもしれない。こいつは平気で裏切る奴だ」
タカタカはプレイの憎しみをあおった。
「そう思うなら今すぐやったらいい。だがこんな暗闇で俺を殺してもつまらんだろう」
プレイは答えなかったが、息子の殺気が一段と鋭さを増すのを感じた。
「さあ、とっとと歩け、もたもたするな」
羽を振り奇声をあげるタカタカ、沈黙をつづけるプレイ。張りつめた緊張感の中、黙々と足を前に進めた。次第に行く手がぼんやり明からんできた。反対に踏み出す一歩が重くなっていった。俺は悩んだ。一体どんな顔をしてプレイを見たらいいのだろう。光にはぎ取られていく闇が恋しくてたまらない。しかし、そんな迷いに関係なく出口は容赦なく迫ってきた。どうやら雨は止み、太陽が姿を現したようだ。暗闇に慣れた目には地面がまぶしく見えた。まるで光の中に飛び込んでいくように洞窟の外に出た。目を細め辺りを見回した。プレイはすぐ真後ろにいた。
「プレイ、その中りに岩があるだろう？どうだ」
タカタカは陽が眩しすぎるのか、洞窟出口の日陰に隠れていた。
「ああ、この岩がどうした」
「情け深いおまえの父が、この卑怯者に突き落とされた岩さ。ミブユ、私はあの時の光景を今でも忘れられない」
タカタカは待っていましたとその時の情景を陰惨に語り始めた。
「痛手を負ったバラの腹からは骨が飛び出していた。本当なら死んでいてもおかしくはない深傷、しかし彼は戦い続けた」
プレイの耳の片方が俺へ、もう片方がタカタカの方に向いた。
「しかし、こいつは恐れをなして逃げだした。結局、気迫で完全に負けていたのさ。完全に萎縮したこの臆病者はお前の兄弟を自分の縦にした。確かイサクという名だった。バラは言った。『子供を助けるなら逃がしてやる』と。しかし半狂乱になっていたこいつには何も聞こえていなかった。逃げたい一心でバラの注意をそらそうと、イサクを谷底へ放り投げたんだ」

「それは違う、あれは子供が暴れたからそうなったんだ、投げ込んだ訳じゃない」
「また言い訳か？なら聞くが、あの時、見たのは夢か？それとも私が嘘をついているとでも？事実じゃないのかよ、どうなんだ言ってみろ」
「・・・」
「何にも言い返せないなら黙ってろ」
興奮を押さえきれずタカタカは光の中へ這い出してきた。その姿は到底禿鷹には見えなかった。顔と首の皮膚はただれ、翼の羽は多くが抜け落ち、残っている羽も土ネズミのように白茶けていた。折れている右足と右羽は不自然な方向に固まって動かすことも出来ない。タカタカは干からびた老木のような体を揺さぶり訴えた。
「お前の父バラはその岩に宙づりになりながら辛うじてイサクを抱き留めた。しかし深い傷を負っている彼に自力で這い上がる力は残っていない。死を覚悟した彼は『自分は良い、だから子供を助けてくれ』とイサクを差し出した。こいつは聞く耳も持たなかった。虫でも潰すようにう岩にかかる前足を渾身の力を込めて踏みつぶした。骨が砕ける鈍い音。微かなうめき声。イサクをしっかり胸に抱いたまま。まるで吸い込まれるように谷底へ消えていった」
さも信じられない光景だったと言わんばかりにタカタカは首を振った。奴の大げさな仕草が悔しくて仕方なかった。
「それだけじゃない。ミブユは残されていた他の子供達に襲いかかった」
「もうやめろ、十分だろ」
「続けろ、あんたは自分のした事を後悔するがいいさ」
プレイは俺をじっと見据え、タカタカに話を続けさせた。話は屍を一カ所に積み上げ骨山となり、俺の魂はその山影にすっぽり覆われ冷えていった。反対にタカタカの言葉は熱を帯び、身体はわざとらしい悶絶を繰り返した。
「谷へ放り込まれていく子供達の悲痛な叫びが木霊した。見る見るうち暗闇に消えていく小さな身体。父の名を呼ぶ者、母に助けを求める者。谷そのものがもがき苦しんでいるようだった。しかし、それもあっという間の出来事。谷の荒い呼吸を静けさが覆い隠し、何事もなかったように鷲が舞った。その時、岩陰からバハラが現れた。普段なら来る事のない洞窟。しかし母親の感が子供達の異変に気づかせたのか、いつも涼しい顔をしている彼女の表情に何ともいえぬ不安が覆っていた。バハラは聞いた。『バラはどこ？子供達は？』こいつは言った。『みんな俺が殺した』無論、彼女は信じなかった。『貴方になんか出来るはずがない』とな。しかしミブユは限りなく真実に近い嘘をバハラに聞かせ、さもすべての責任は彼女にあるように追いつめた」
タカタカは空を仰いだ。白く濁った眼球は少しも動かない。恐らく光のない場所に長くいすぎたせいで奴の目は腐ったのだろう。
「お前の母親は自分のせいでバラや子供達を死なせてしまったと悔やみ続けた。しかしミブユは彼女を慰める事もせず、ただ毎日のように犯し続けた。全てを帳消したいのか一日も早く自分の子供を産ませようとした。その時の彼女は声を上げる出もなく身をよじらせるでもなく。いつ死んでもかまわない。そんな風に見えたよ」
プレイはやりきれないのか斜めを向いたまま歯を食いしばった。
「しかし、皮肉だな」

饒舌に語っていたクチバシが動きを止めた。何が言いたいかは分かった。けれど口を開いたのはプレイの方が早かった。
「あんたは何故俺を育てた。自分のした事への罪滅ぼしか」
プレイが俺に育てられたのだという意識を持っていてくれたことが嬉しかった。しかし俺は彼を果たして育てたのだろうか？ただ殺せなかっただけと違うのか？
「罪滅ぼしなど考えた事もない。ただお前が可愛くて。殺す事など」
タカタカはなおも前に進み出た。
「やめなよ、どうせバハラにおねだりされて引き受けたんだろう？」
汚れたクチバシがせせせら笑った。
「まんまと雌の罠にかかったというわけだ。あんたがこれほど間抜けな雄だったとはねえ。まあいいさ、事ここまで来たら潔く殺されてやれ、それが一番ふさわしい死に方だ！」
「バハラはそんな雌じゃない」
今自分が言った言葉と同じような言葉をバラがから聞いたような気がした。皮肉な物だ。
「聞かせてくれ。本当に殺したいほど俺が憎いのか？」
細く長い息を吐きながらプレイは目を閉じた。そして瞼の裏側に昔でも見るように懐かしそうな顔をした。
「心から尊敬していた。強くて優しくて、そして何よりもそれが自分の父だという事に誇りを感じていた。なのに、あんたは裏で何をしていた？俺や母さんを欺き嘘にまみれた笑顔ばかり。本当の父でないと言うだけでも悲しいのに、あんたの不潔さを知って俺は自分が壊れそうだ。この苦しみから逃れるにはこの世からあんたを消すしかないんだ」
声を荒げるわけでもなく淡々と言葉が地面に落ちていった。
嘘をつきたくてついたわけではなかった。正直に生きようとすると掴んだ幸せが愛しくなり、醜い行いさえ目をつぶり飲み込んでしまう。振り返ってみてもあの時の俺にはああ振る舞う以外なかった。
「俺の苦しみはあんたが死ぬまで終わらない。少しでも俺を思うなら毅然として戦え」
「分かった。それで全てに決着がつくなら望み通りにしてやろう」
「自信ありげだな、俺が負けるとでも？」
「いや、母さんを残していけないだけさ。もう独りにしないと約束したんだ」
「息子の俺がいる。それに真実を知ったなら母さんも側になんていたくないだろうよ」
「かもな。それでもいいから側にいたいんだよ」
タカタカは呆れたと首を振った。
「あー体中が痒くなる。プレイ、こんな野郎早く殺してしまえ。お前だって目障りだろうよ」
「俺が死んでも母さんさえいたらいいと言うんだな！ミブユさんよ」
俺の名を呼び捨て足下の小石を払いのけた。そして身体の肉を盛り上がらせ象の牙のように爪を伸ばした。
「バハラは俺の雌だ」
「黙れ、聞きたくない」
プレイは空高く飛び上がった。その様はまさにバラ、おそらく身体は自然とそう動いてしまうのだろう。傍らは切り立った山、目前には深い谷、そして足下には僅かばかりの地面。

逃げ場のない事など誰よりも俺が知っていた。目を閉じ、耳で感じる風景を思い浮かべた。力の差は悲しいほど大きい。しかし俺も昔は自分に酔うほど強かった雄。今は自分を信じるしかない。その時、風を切り裂く鋭い音が斜め真向かいから聞こえた。こんなときバラならどうするだろう。それを想像すると身体が無意識に動いた。俺は目を閉じたまま音のする方向に飛び上がり、地面に背を向けるように身体をひねった。
「なぜ？」
プレイの驚く声がした。その声に俺は目を開けた。真っ白な腹がそこにあった。すかさず爪を突き立てた。横腹に見事に突き刺さった。皮を引き裂こうと前足を振り下ろそうとした。しかしその前に激痛が右足に走った。プレイが噛みついていたのだ。このままでは足を折られ戦えなくなる。とっさに左足であごを蹴り下ろした。骨のはずれた鈍い音がした。同時に右足は離れ、互いに体勢を崩し地面に叩き付けられた。頭を打ったのかプレイは起きあがれない。俺も背中を岩にぶつけ息が出来ない。タカタカが叫んだ
「何をしている、起きろ」
「どこだ...」
プレイは要約立ち上がったはいいが、意識が朦朧として視点が定まらない。今だ、無我夢中で飛び上がった。その時、俺の身体に異変がおきた。まるで羽が生えたように軽々と空に舞がっていった。慌てたタカタカが飛び出してくるのが眼下に見えた。つられてプレイも空を見上げた。
「どこにいる、どこだ」
まぶしそうに目を細める様子からして何も見えていないらしい。あわてふためき右に左に身体を傾けるプレイ。明らかに焦りが見えた。恐らく今まで負けた事がないのだろう、窮地に追い込まれてどうして良いのか解らなくなっている。見えない敵に我慢できなくなったプレイは愚かな行為に出た。前足の爪を限界まで伸ばし後ろ足だけで立ち上がった。威嚇のつもりなのだろう。だが俺たちの身体は後ろ足だけで支えられるほど軽くはない。ふらふらと揺れるその姿は無防備以外のなにものでもなかった。この時点で両者の立場は明らかに一変した。俺はプレイの背中目がけて急降下をばじめた。小さく見えていた身体があっという間に大きくなる。そしてあっという間に俺の影が彼の顔を覆った。
「ウッ」
着地すると同時に背肉をはぎ取った。前足を宙に投げ出し固まる巨体。吹き出す血が俺の顔を赤く染めた。今ならやれると首に前足の爪をかけた。ふらふらになりながらプレイはろれつの回らない口で強がって見せた。
「さあ殺せよ、ずっとそうしたかったんだろう？そうなんだろ」
プレイの気持ちが痛い。息子は俺と過ごした日々をどうしていいのか解らないでいる。そう思ったらこれ以上できない、やはり俺には無理だ。
「助けてやる、今のうちだ俺の前から消えろ」
萎えた闘争心を感じ取ったのかプレイは俺の爪をそのままに、ゆっくりと振り返った。
「そうやって偽善者ぶって、騙してきたんだろ。もう沢山だ、あんたがやらないなら俺があんたをやる」
そう言うと俺の首を噛みつこうとした。しかしさっきの空中戦で顎がはずれ力が入らない。
「くそ、俺が負ける訳がない、この俺が」

悔しそうに大粒の涙をこぼすプレイ。悲しげな顔は体が弱くよく泣いていた子供の時そのままだ。それを見たら身体から力が抜け、もうどうでもよくなった。これ以上この子を苦しむ姿を見ていられない。俺は皮肉たっぷりにプレイの顔に唾を吐きかけ言った。
「呆れたな。お前の方こそだらしなさすぎやしないか？。こんな奴を息子だと育てた俺が恥ずかしい。それにバラ、バラといっているが、お前の父親はただ弱かったから死んだんだ。結局、おまえら親子してだらしなかっただけだろう。弱い奴は死ぬ、当然の事だ」
「何を？」
泣いていたプレイが目を真っ赤にして目をつり上った。
「ふざけた事ばかりぐたぐた言うからだ。それも仕方ないか、バラも口先だけだったかな」
俺はプレイの顔を地面に叩き付けた。起きあがったときの息子の顔は怒りで満ちていた。まっすぐをこちらを見据える目は血走っていた。
「父さんの事は言うな」
プレイは狂ったように前足で俺の顔面を殴りはじめた。まるで岩にぶつかるような衝撃だ。俺は逃げずに耐えた。顔中が晴れ上がり、片方の耳が聞こえなくなった。そしてあまりの激しさについに倒れた。だがプレイは止めなかった。それどころか更に激しく責め立てた。何度も何度も後ろ足で蹴り上げ、小石のように身体が跳ね上がった。もう手も足も出せなくなっていた。プレイの荒い息使いが嵐でも吹き荒れるように聞こえる
「早く死ね、早く死ね」
いつのまにかバラが落ちたのと同じ場所に追いやられていた。すぐそこは深い谷、だがもう立ち上がる事も出来い。あと一蹴りされれば終わる。背後でタカタカが羽をばたつかせ騒ぎ狂う。自分以外のものがゆっくりと動いて見える。不思議な感覚に包まれたまま次第に目の前が暗くなっていった。
「下で父さんが待ってる。そこでもう一度殺されたらいい」
最後の一撃をとプレイは前足を振りかざした。俺は目を閉じ、心の中でバハラに一言『すまない』と詫びた。その時だ
「やめなさい。プレイ」
どこからかバハラの声が聞こえ、ハッとして目を開けた。あゆみよってくる彼女がいた。何故ここに？
驚いているのは俺だけではなかった。我に返ったプレイが目を丸くしていた。
「おかあさん...」
「私の雄に何すんの、もし、一歩でも動いたなら容赦はしないよ」
バハラは俺の元にかけより、パンパンに腫れた顔をなめあげた。良いにおいがした。いつもの彼女のにおいだ。
「しっかりしてよ。貴方らしくもない」
「いつの間に来たんだ、驚かせるなよ」
「それは私の言葉、出かけるときの様子がおかしいから隠れてついてきたの」
「そうか」
「そうかじゃないは、貴方とプレイが洞窟に入っていったかと思ったら、今度は外で殺し合い。真剣勝負ならいざ知らず、貴方ワザと負けようとしていたじゃない。私がいるのよ。そんな事じゃ困るの」

ポトリポトリと落ちるバハラの涙、俺の顔はあっという間にぐちゃぐちゃに濡れた。
「母さんは、そいつに騙されてるんだ。いい加減に気づきなよ」
自分を全く見ようとしない母親にプレイが我慢できなくなった。しかしバハラは息子に振り返ろうとはしなかった。まるで何も聞こえないかのように俺だけに語りかけてくる。
「こいつは兄さんを囮に父さんを殺したんだ。そして何も知らない母さんのせいにしてのうのうと生きてきた。そんな卑怯な奴なんだ。ずっと騙されていたんだよ」
プレイはこの時とばかりに饒舌に訴えった。しかし彼女は顔色一つ変えなかった。それどころか思いもよらぬ言葉を口にした。
「そんな事、始めから知っていたは」
耳を疑った。何故だ？真実を知る者はタカタカを１羽だけ。しかし言わないと約束だったはず。タカタカにら向かって俺は吠えた。
「タカタカ、お前の方こそ裏切っていたんじゃないか」
お気楽に観戦していたタカタカは飛び跳ねた。
「俺はしらない、本当だ」
慌てた顔で違う違うと激しく顔を横に振った。自分言葉に動揺する雄達をさらりと眺めた後、少しあきれ顔でバハラは言った。
「その屑は関係ないは、ミブユ、貴方自身が話してくれたのよ」
「嘘だ、俺が自分で言う訳がない」
「貴方は正直者、悩んでいると寝言に出るの。それもハッキリとした口調でね」
まだ幼かった頃、母から何度か言われた覚えがある。『お前の寝言は本当にはっきりしているね。起きて話しているのかと思って聞いていたら・・・ったく、いい迷惑だよ』と、ずっと独りで暮らしていたから気がつかなかったが寝言を言う癖は直っていなかったのかもしれない。もしバハラの話が本当ならどうして平然としていられたのか？
「なぜ、俺を憎まなかった。いや殺そうと思えば出来たはずだ」
「憎んだわ、当たり前でしょ」
「だったら」
「だからよ。それが私の復讐だったの」
「どういうことだ」
「貴方が私を好きなっていけばいくほど自分の犯した卑怯な振る舞いに苦しむ。それを見ているのが楽しかったの」
そんな事を考えながら生活していたのかと俺は愕然とした。そして恐ろしい疑問が大きく頭をもたげた。
「もしかしてプレイの事も復讐か？やはり、はじめからこの日が来る事を願って育てさせたのか？」
彼女から身体を離そうとする自分がいた。実際、谷に突き落とされようとしたさっきより、今の彼女のほうが恐怖に感じた。「違うは。産まれるまでは貴方の子供だと私も疑わなかった。だからあんなに憂鬱だったのよ。憎んでいる雄の子供、ましてバラより弱い雄の子供なんて腹に入れておくのさえ嫌だった」
それを聞いているプレイの顔がニヤリとした。タカタカは腹を押さえ苦笑していた。
「聞いたか、やっぱり母さんはあんたが大嫌いだったんだよ。間抜けなのはそっちほうだ

ったな」
バハラは首を振った。プレイは首をかしげた。
「でも今は貴方といたいの。うまく言えないけれけど安心できるし感謝もしてる」
母親の一言一言が信じられないとプレイは顔を背けた。
「ちょっとまってくれよ、母さん」
「でもそれだけで愛せるようになったわけじゃないの」
「今更それを聞いても仕方ないよ」
耳を塞ごうとするプレイに向かって、彼女はいっそう大きな声で語りかけた。
「貴方がバラの子だと気づいた時、間違いなく殺されると疑わなかった。でも父さんはそうしなかった。その時の悲しそうな顔を今でも覚えているは。申し訳ないと思ったけれど、母さんうれしかった。ああ私は大切にされている。そう実感したの。そして思ったのよ、もう復讐はお仕舞いにしようって。貴方が巣立った後一から新しい暮らしを始めたいと。そして、それが私の夢になった」
「まってくれよ、母さん、どうかしてるよ。こいつがどれほど母さんを苦しめたか忘れたわけじゃないだろ。なのに少しぐらい優しくされたからって、おかしいよ」
くってかかるプレイにバハラはピシャリと言い返した。
「なら貴方ならどうした？殺したでしょ？」
「どうせ母さんに嫌われたくないからそうしただけだろ。反対に言えばそれだけ臆病だったって事じゃないか」
俺は忘れ去られた岩のようにそこにいた。
「生意気言うんじゃないわよ。そのお陰で貴方は立派に成長する事が出来たんじゃない。違う？」
「こんな事なら生れてきたくなんてなかったさ。いやな事ばかりじゃないか」
「一体、何が不満なのよ、ミブユが貴方に何をしたというの。全て貴方の生まれる前の事、彼は十分苦しみ抜いたの、ここまで大きくしてもらった貴方に彼を卑怯者呼ばわりする資格はないし、それは母さんが許さないは」
あまりに強い態度にプレイはたじろいだ。そして言葉を見つけられず、傍らに落ちていたような気持ちの小石を母親に投げつけた。
「ただ、母さんは寂しかっただけじゃないか。優しくしてくれる雄ならだれだってよかったんだろ。情けないよ、恥ずかしくないのかい」
「そう思いたいなら思いなさい。でも雌がそうおもって何が悪いの。いつも側で見守ってくれる雄が必要だと願ってなにがいけないの。まして自分の子供も作れずに雌に愚痴も言わず尽くしてくれる雄に惹かれる事が恥ずかしい事？私を見下したいならそうしたらいい。もうバラの事は忘れたは、今の私は彼の雌。そして巣立った貴方はもう子供じゃない。早く私達の縄張りから出て行きなさい」
バハラは毛を逆立てにじり寄った。
「もとはと言えばここは父さんの縄張りだったはずだろ。こんな奴に渡せないよ」
「どうしたいのよ」
「こいつを殺し、父さんから奪ったものを取り返すのさ」
「どうしても？」

「変わらないよ、それに母さんも俺が引き取る、心配しなくていいからね。不自由はさせないから」
「ばかげてる、今度は息子の貴男が私を苦しめようとするの？ねえ、どうしてそっとしておいてはくれないの。そんなに雄ってそんなに偉いの？答えてよ」
プレイはバハラの訴えに耳を貸さなかった。そして何も答えずに母親の前を通り過ぎようとした。
「私から幸せを奪おうというのね」
すると彼女は信じられない行動に出た。息子の横腹に本気で噛みついたのだ。牙は肉深くへと食い込んだ。激痛に顔をゆがめたプレイ。なおも食い下がる彼女。痛みに耐えきれずプレイは突き飛ばした。彼女は近くにあった岩に顔面からぶつかった。額がパクリと割れ、勢いよく血が吹き出した。美しい彼女の顔がみるみる膨れ歪んでいった。それを見たとたん、俺は怒りに震えた。身体はふらふらのはずだった。なのに、何処にそんな力が残っていたのかと思うほど力がみなぎり、衝動にまかせプレイに襲いかかった。恐れなど感じなかった。爪を顔に突き立て上から下へ切り裂いた。プレイの鼻が取れ頬の肉がそぎ落ちた。プレイは飛び上がった。又空中戦に持ち込むつもりだろう。今なら同じように飛び上がれる気がした。さっきの跳躍は偶然ではない、そんな不確かな自信が頼りに俺は空へとプレイを追った。みるみるうちに地面を離れていく身体。反対に前をいくプレイが大きくなる。彼の姿が目前まで来た時、俺は右足に噛みついた。慌てたプレイは鋭い爪を俺の腹に突き立て肉を鷲づかみにした。二つの身体は一つになりクルクルと回った。そのとき山から突風が吹き下ろした。俺たちの身体はふわりと谷の方へ流された。目を下に向けると底なしの闇。しかしプレイの爪は俺の身体から離れない。このままでは間違いなく谷底へ落ちていく。
「こうなったら、父さんの所まで連れて行ってやるよ」
するとその時、絶叫するバハラの声が聞こえた。見下ろす先に地面にへたりこみ今にも倒れそうな彼女がいた。
「貴方、どこへも行かないで。お願い、もう取り残されるのは辛すぎるよ」
プレイは悲しげに笑った。
「俺はどうでもいいんだね...」
声は谷を吹く風にかき消され地上のバハラには届かない。
「悔しいけれど母さんに返すよ、父さんを」
次の瞬間、強烈な蹴りが俺の腹に打ち込まれた。身体は空高く跳ね上がり、そのままバハラの目の前の地面に叩きつけられた。しかし勢いがついた身体は止まることなく谷へ向かって転がりだした。正直もうダメだと思った瞬間、バハラの身体が俺にしがみついた。落ちる寸前だった。
「母さん」
絶叫に振り返った。プレイが足をばたつかせ目の前を真っ直ぐに落ちていった。バハラが唾を飲み込む音がはきっきりと聞こえた。バハラを振り払い崖下を見た。みるるうちに小さくなっていくプレイ、暗闇に飲み込まれる寸前、一筋の光が恐怖で歪んだ彼の顔を舐めた。彼女はフラフラと立ち上がった。ただ呆然と消えた息子の姿を探そうとしている。彼女を押し倒し押さえつけた。

「もう遅い、諦めろ」
バハラはうなだれ、小刻みに肩を振るわせ泣いた。
「自分の命より大切にしていたはずなのに・・・、なのに私はあの子を見捨ててしまった」
絞り出すような嗚咽。彼女は空を仰ぎ唇を噛んだ。
「すまない」
首を振るバハラ。
「貴方の為にしたんじゃない。結局、私は自分が可愛かっただけ。彼方と産まれてくる子供と平穏に暮らしたい... ただそれだけで」
「バハラ、今なんと言った」
彼女は自分の腹に目をやった。雄の俺の目には何の変わりもないように見えた。
「もうだいぶたつは、貴方の子よ」
「なんで今まで言わなかったんだ、やはり迷っていたのか？」
どうしても以前の時の事が頭に浮かんできしまう。
「そんなわけない」
「なら何故？」
「知ってでしょ、プレイの事で体はぼろぼろだった。いつ流れて不思議じゃなかったのよ。だからとてもじゃないけれど怖くて言い出せなかった。でもね本当に嬉しかった。これでやっと新しい暮らしが始められる。早く打ち明けられる日が来てほしい、そう願いながらじっと待っていたの」
「もういいのか？」
「ええ、多分。だから今日にでも話そうと思っていたの」
彼女は瞼を閉じ、涙の膜を大きな粒に押し固め頬に追いやった。
「なのに私に黙ってこんな所へ来て、挙げ句の果てにプレイに殺されようとしていた。もし貴方がいなくなったらどうしよう。今度は１人で産まないといけなくなる。そう思ったら怖くなったの。いいえそれだけじゃない。、長い苦しみの末にやっと幸せになれたのに、突然貴方がいなくなったら私は誰の名前を呼べばいいの？もう初めから誰かとやり直すほど若くないのよ。貴方との暮らしで私は涙を全て流し尽くしたの」
彼女の視線は谷下の光と影の境目をなぞっていた。まるで生と死がそこで分けられている様だった。
「でもやっぱり酷い母親。どう言い訳けも出来ない」
「君が直接手をくだしたわけじゃないだろ」
「同じ事よ、第一それを言ったからってどうなるの？すがる我が子を見殺しにしたの」
精一杯自分を傷つけようとするバハラ、もう良いと、止めてくれと首を振った。
「怖いは... 貴方、私は自分が怖くてしかたない」
「たから、したくてそうした訳じゃない。君は苦しんでいる」
「いいえ、泣いてはいるけれどすぐに泣きやむような気がするの。それにこんなにひどい事をしたのにどこかでホッとしている私もいる」
「お腹の子供が私をそうさせているのかもしれない。そうじゃないと安心して産まれていけないと。でもそれだけでもない」
泣きはらした彼女の目が冷たく透き通っていく。話すほどに気持ちの整理をしていくのが

よくわかった。
「雄の優しさを水のように飲み干せるなら、例え最愛の子より雌は雄を選んでしまうのよ」
バハラは振り返り俺の身体をしっかりと抱き締めた。つかまっていないと自分はどこかへ落ちてしまう。そんなふうに見えた。俺は彼女の額から流れる血をなめた。血の下からぱっくりと割れた皮があらわれ骨も見えた。
「雌って怖いと思うでしょ？何をするか解らないものね。嫌いになった？いいのよ・・・」
そう言いながらも俺を放そうとはしない。
「それが君なんだろ？」
「ええ」
「俺には？」
「彼方次第。ずっと変わらないでいてくれたなら、私だけの彼方てでいてほしい。争いはもう沢山。誰よりも彼方だけに包まれて眠りたい。こんな自分は見たくないの」
「どうしたらいい？」
「そんな事聞かなくて良いよ、今の貴方なら私が何を言わなくてもわかるはずだもの、好きなようにしたらいいの」
涙は俺の身体にぬぐい付けられ跡形もなかった。
「約束よ」
「約束だ」
それを聞くと彼女の顔がやわらいだ。
「じゃあ、全てを消してましょう。もう本当に終わりにしないと」
彼女はゆっくりと立ち上がった。そしてタカタカのいる洞窟へ向け歩き出した。奴の濁った目には彼女の姿はハッキリと見えない。ジリジリと近づいていく足音は緊張感を増していく。身の危険を感じたタカタカは慌てた。
「なにをする、この淫乱。自分の子まで殺しやがって」
「あんたさえいなければ、こんな事にはならなかったのよ」
「だまれ、本当の事を教えてやっただけだろうが。男の情にすがって息子を裏切ったのはおまえだろうよ。あんたはミブユと同じ最低のライオンだよ。ケツの穴だしな俺がつっこんでやるぜ」
「いくらでも良いなさい、あんたなんか死ぬばいい」
バハラの前足が翼を踏んだ。焦って逃げようとするタカタカ。冷や汗が奴の醜い顔の表を流れ落ちていく。
「俺まで始末しようというのか。あんたそこまでしてミブユに惚れたのか」
声は震えていた。俺は彼女の迫力に動けなかった。
「そうよ、でも彼方なんかに解らなくたっていい」
バハラは口を開け、タカタカのひしゃげた頭をそっと噛んだ。もう奴はぴくりとも動けない。それは俺も同じだった。
彼女は肩で一呼吸した。
「あああああぁぁぁ」
悲鳴はあっという間に消えた。奴の頭はまるで水がはじけるように飛び散った。もう死んでいるとはわかっていても彼女は止めなかった。首の骨を粉々に砕き、内蔵を引き出し踏

みつぶした。その姿は憎しみの塊そのものに見えた。原型がわからなくなるまで無惨にタカタカを引き裂いた。俺は彼女に駆け寄り押し倒した。
「やめろ、終わったんだ」
興奮から覚めない彼女は俺の前足に噛みついた。牙は肉深く突き刺さりギリギリと骨をきしませた。俺は敢えて彼女を払い除けようとはせず、黙ってみていた。気も狂わんばかりに自分の暮らしを守ろうとする姿に雌の強さを知った。何も言わず俺はされるがまま、じっと彼女を見つめていた。暫くすると要約彼女は我に返った。
慌てふためき彼女は牙を抜いた。牙から血が滴り。俺の前足からは骨が覗いていた。
「どうしよう、貴方、私、貴方まで」
血で顔を真っ赤に染めた彼女は地面にしゃがみ込んだ。
「いいよ、きみがしなけりゃ俺が奴をやっていたさ」
「ごめんさい」
足を引きすりながら、泣きやまない彼女の後ろに回った。
「だめ・・・お腹の子供が」
聞き入れずゆっくり彼女の身体の中へ入っていった。泣き声は次第に小さくかすれていった。
「お前の中にいさせてくれ」
息づかいは次第に熱を帯びていった。あれ程堅くなっていた身体がなまめかしく揺れ始め、体が俺を迎え入れるようとし始めていた。
「何もかも忘れさせて」
バハラは目を潤ませ、しどけなく濡らしていた。俺は腰を打ち付けながら考えていた。果たしてこれで俺の雌にしたといえるのだろうか？まるで心も体もいつの間にか彼女に乗っ取られてしまった気がしてならなかった。しかしそんな事を
考えるのは彼女に済まない気がした。俺の息づかいも荒くなり、限界も近づいていた。彼女は背中をのけぞらせ、そして痛いほどに絞り上げた。傷ついた俺の身体に残っていた力は一滴残らずバハラの中に吸い上げられていった。疲れ果て崩れ落ちる寸前、彼女の目が笑ったように見えた。まるで二頭の雌が一つの身体に住み着いているようだった。瞬きするのが怖くなった。もし次に目をあけたならバハラは今の彼女ではないかもしれない。俺はプレイの消えた谷の暗闇をぼんやりと眺めながら又彼女に覆い被さった。今さっき起こった事は夢だとでも言うように彼女は幸せそうに見えた。
「もっと強い雄になって・・・」